SGU 国際日本学拠点　早稲田大学　　2016年7月26日　　65月27日･6月24日締切

稲賀繁美　いなが･しげみ

1.　　講演題目

刻印と反復：森村泰昌における世界美術とその作者･石川九楊の『中国書史』における筆跡と歴史を考察の出発点に

- 2.　講演要旨
- 森村泰昌は泰西世界美術史を自ら再演してきた。著名な芸術家たちの映像体験を自らの肉体を媒体にして反復し、憑依を試みてきた。森村の「わたし」とそこに再演された歴史上の幾多の「私」とが重複し、その二重像のうちに、並行宇宙が築かれる。死去した作者が生身の生者である森村に乗り移る。この往還にあって、歴史とはいかに位置づけられるのだろうか。

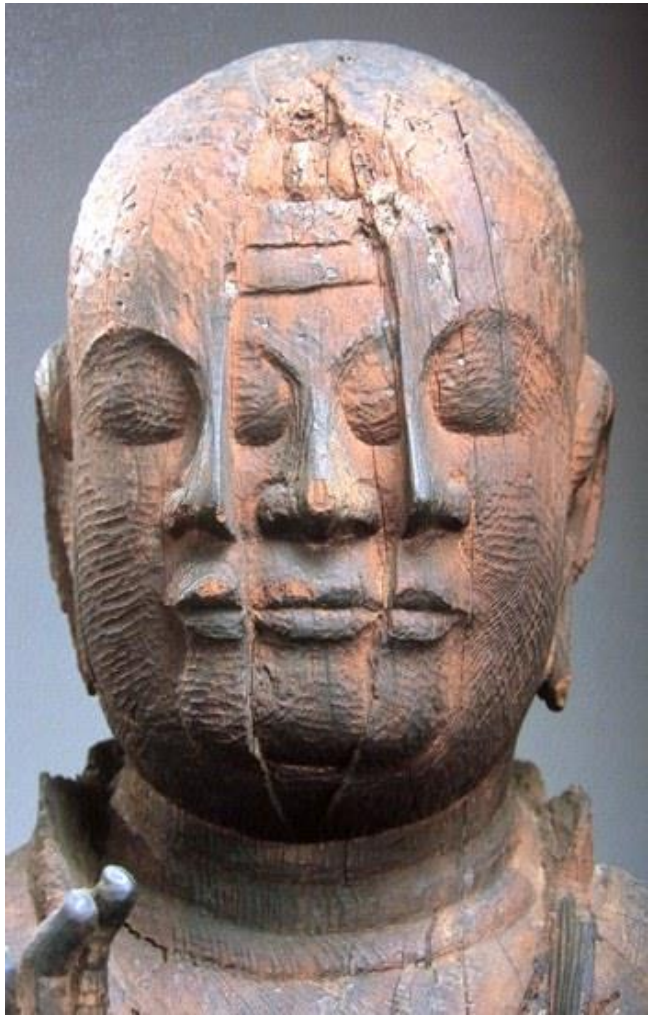
- 一方、石川九楊は、『中国書史』において、書の筆跡のうちに痕跡を宿す歴代の書家たちの営みを辿りなおした。紙と墨と筆によって成立する書道の歴史は、その前史としての石と影と鑿による刻印の歴史を反復しつつ隠蔽することで成り立っている。さらに王羲之の真筆は、現在では複数の時代の模刻や転写による複製群の堆積の背後に垣間見られる幻に過ぎまい。だが九楊はそこに歴史認識の真理を見出そうとする。
- これらのふたつの例を指標として、文化生産者としての〈作者〉を歴史記述の流のうちに定位してみたい。

- 3.　講演者紹介 稲賀繁美 Shigemi INAGA
- いなが･しげみ　国際日本文化研究センター教授･副所長および、総合研究大学院大学教授[併任]。比較文学･比較文化、文化交渉史と比較倫理。

- 主要著書に『絵画の黄昏』『絵画の東方』および『絵画の臨界』の3部作のほか、近著には『接触芸術論』がある。共同研究会成果論文集(編著)としては、『伝統工藝再考：京のうちそと』『東洋意識』*Vocabulaire de la spatialité japonaise* (共編箸)があり、『海賊史観からみた世界史の再構築』(仮題)を準備中。国際研究集会報告書(編著)として、*Crossing Cultural Borders, Rethinking Modern Arts and Crafts, Oriental Aesthetics and Thinking*などがある。

- 2016年からは副所長として、第3期中期計画の国際日本文化研究センター事業「大衆文化研究」プロジェクト研究4班、人間文化研究機構における連携事業、「在外 資料調査･研究･活用」双方の取り纏め(推進室長)ほかの事業担当の傍ら、科学研究費補助金により「うつわとうつし」に関する基盤研究Aの研究代表者を務めている。

《自画像の美術史（ゴッホ／青）》2016年　作者蔵
森村泰昌
自画像の美術史
「私」と「わたし」が出会うとき
国立国際美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA
2016年4月5日[火]～6月19日[日]

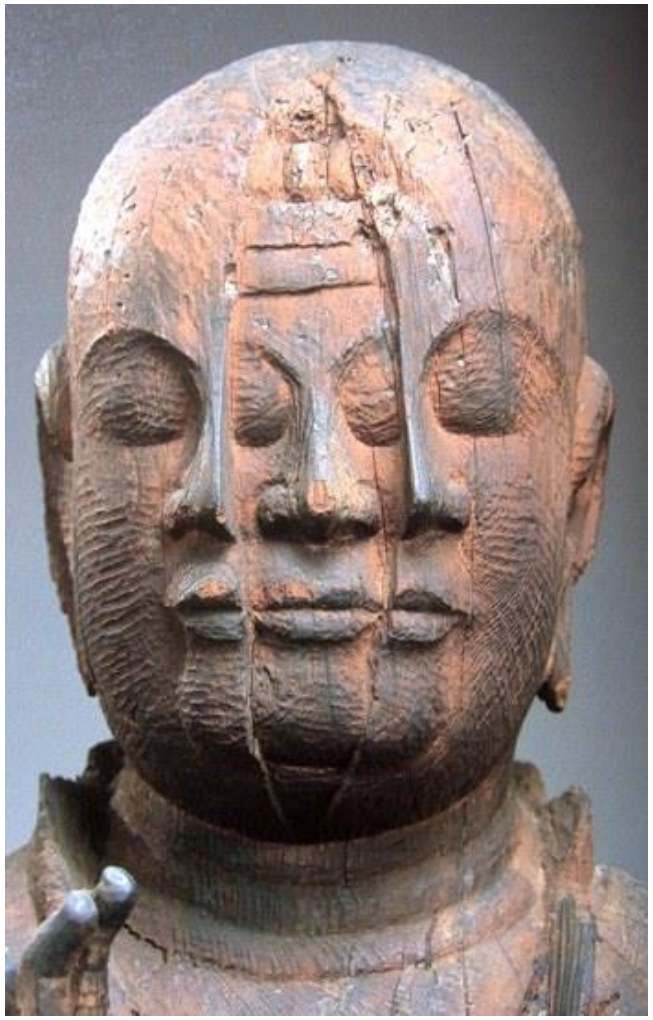


西住寺 宝誌和尚立像顔部

Le signe est une fracture qui ne s'ouvre jamais que sur le visage d'un autre signe.

Roland Barthes,
Empire des signes, 1970, p.72
記号とはひとつの亀裂であって、それはいまひとつの記号の顔面のうえにしか開かない。

Roland Barthes, Empire des Signes, 1972;
ロラン・バルト『表徴の帝国』拙訳



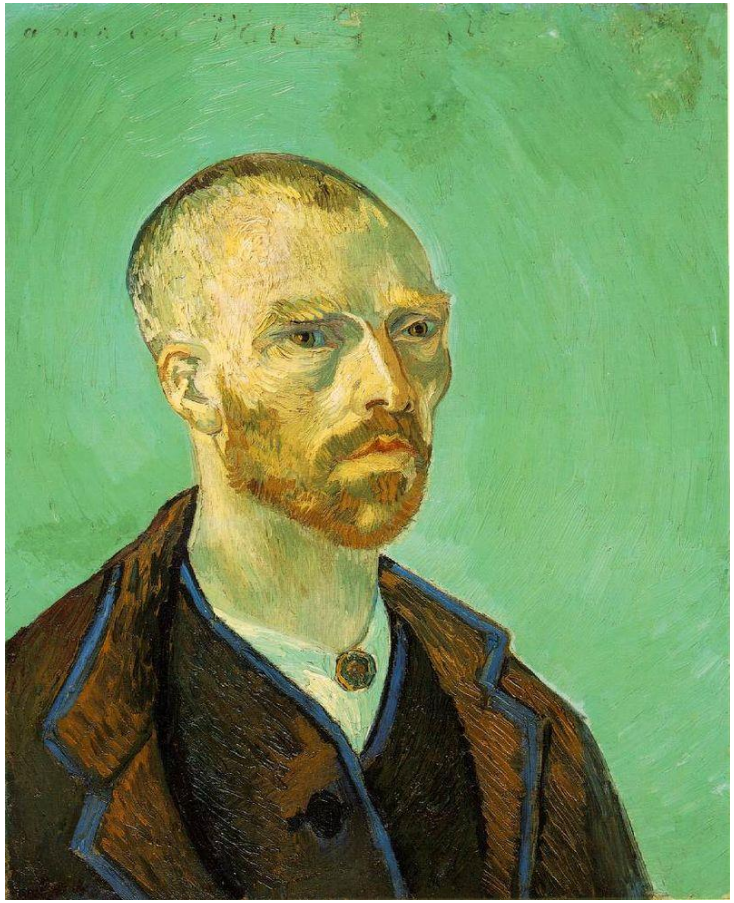
顔の裂け目のなかから
現れたのは、仏性か、
それとも空性か？
記号の裂開と重層？

西住寺 宝誌和尚立像顔部

六本木の森美術館「村上隆の五百羅漢展」
2015-6年

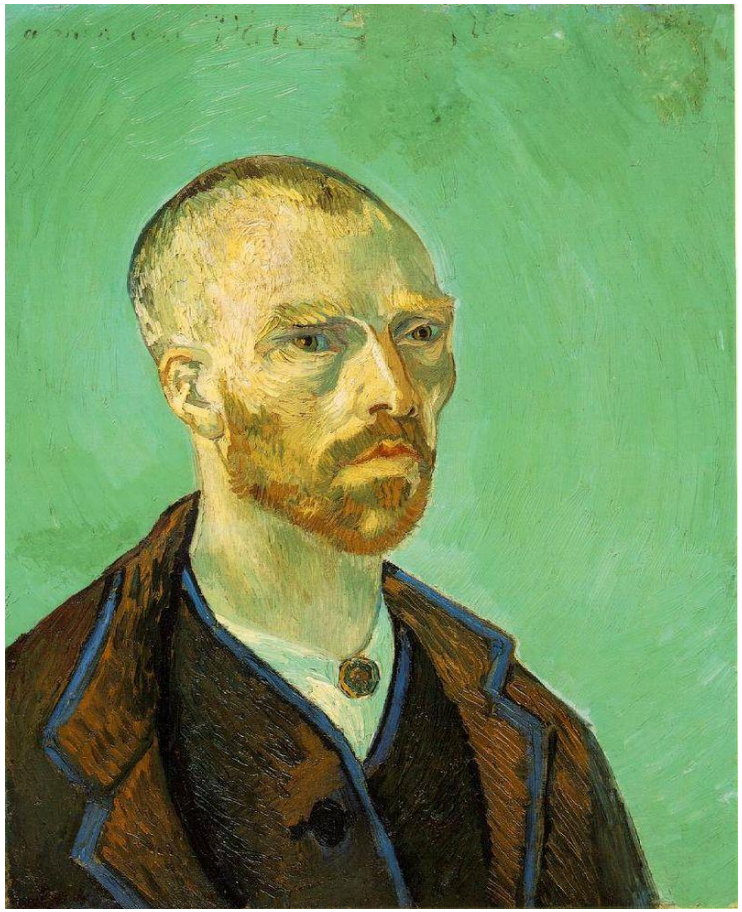
- ここに琵琶がある。だが琵琶法師は――耳が二つ見えるきりだ･･･　なるほどこれでは返事が出来ぬのも道理だ。答えようにも口がないので。芳一に残されているのは両耳のみだ･･･それでは出来るかぎり仰せに従ったということの証しに、ご主君にこの二つの耳をお届けするとしよう。
- その瞬間、芳一は左右の耳が鉄の指でつかまれ、引きちぎられるのを感じた。その苦痛はすさまじかったが、芳一は一言も発しなかった。重い足音は縁側沿いに去っていき、庭に降り、外の通りへ出ていき、聞こえなくなった。頭の両側から盲目の芳一は濃い暖かいものが滴るのを感じたが、手をあげる気力もなかった。

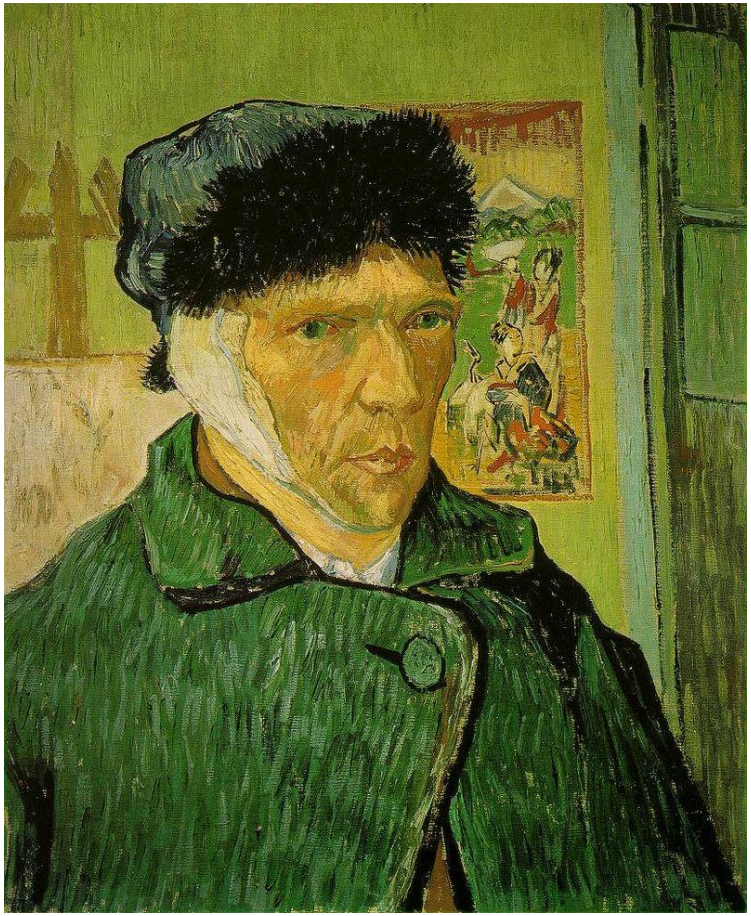
- 　　小泉八雲「耳なし芳一の話」 平川祐弘訳『骨董/怪談』175－6頁。



『坊主としての自画像』。1888年9月
(F 476）

国宝 明恵上人樹上坐像〉



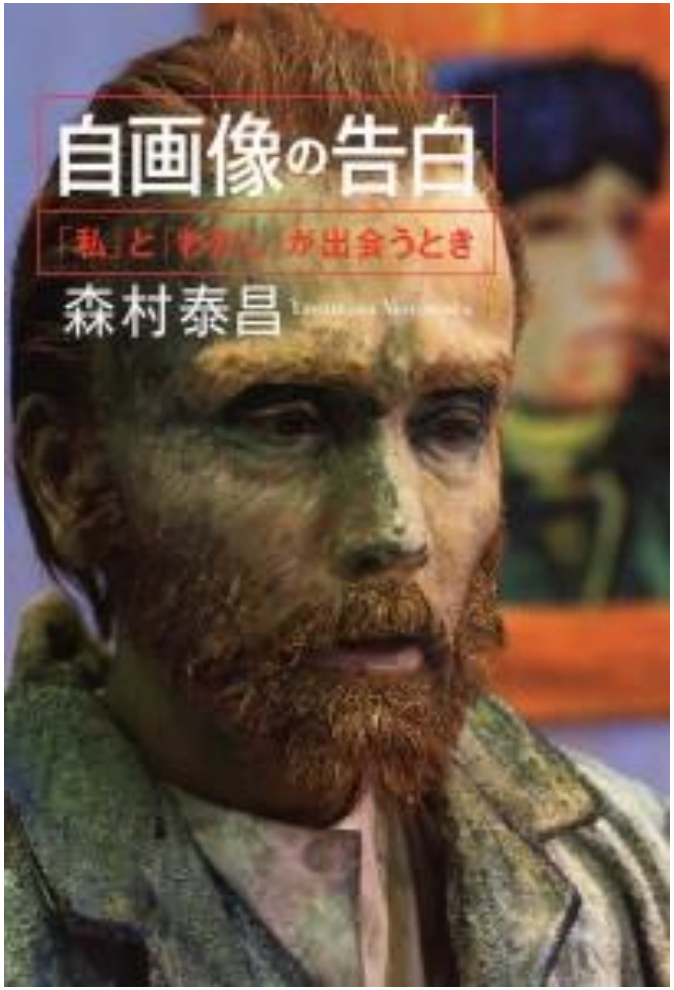


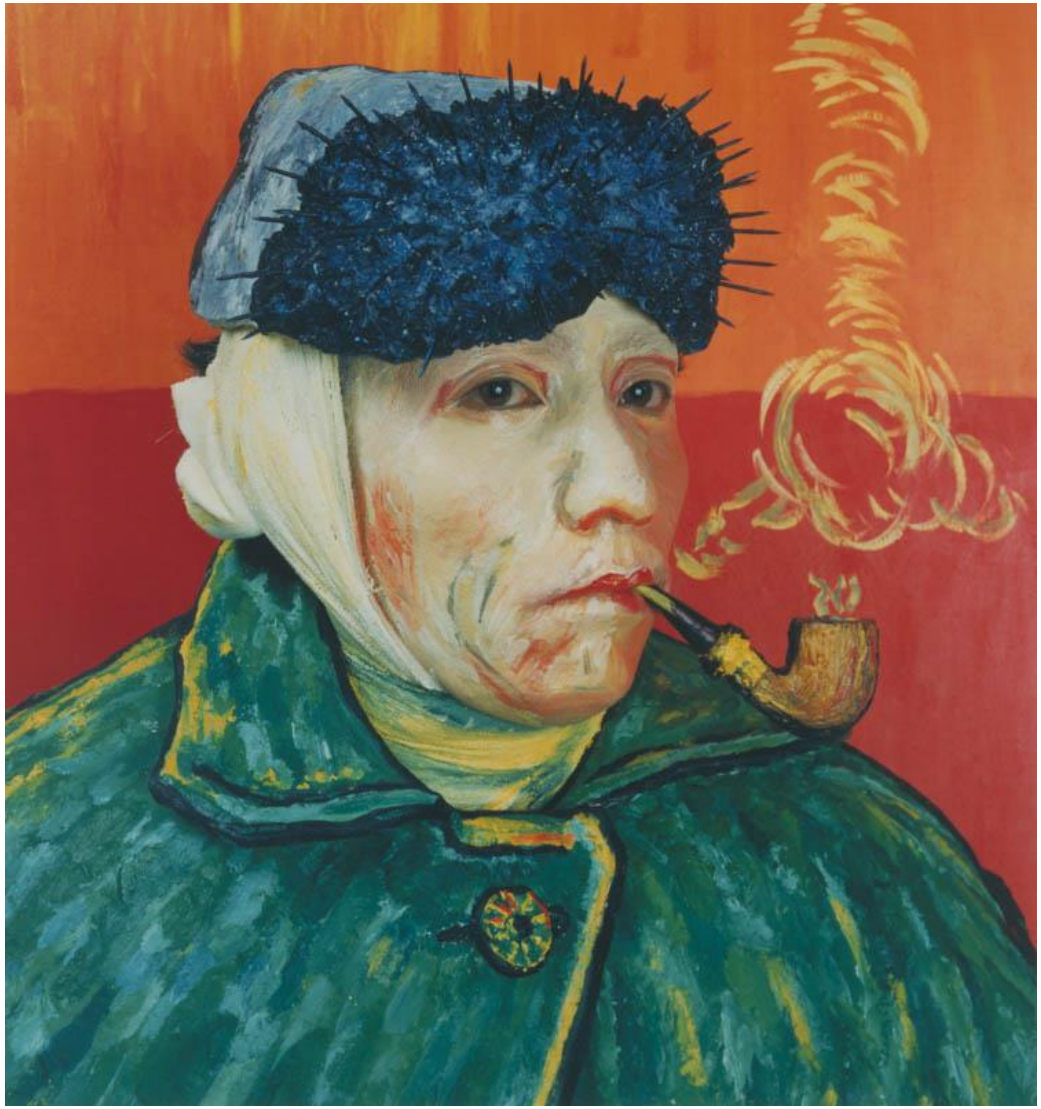
『坊主としての自画像』。1888年9月。(F 476)。
[

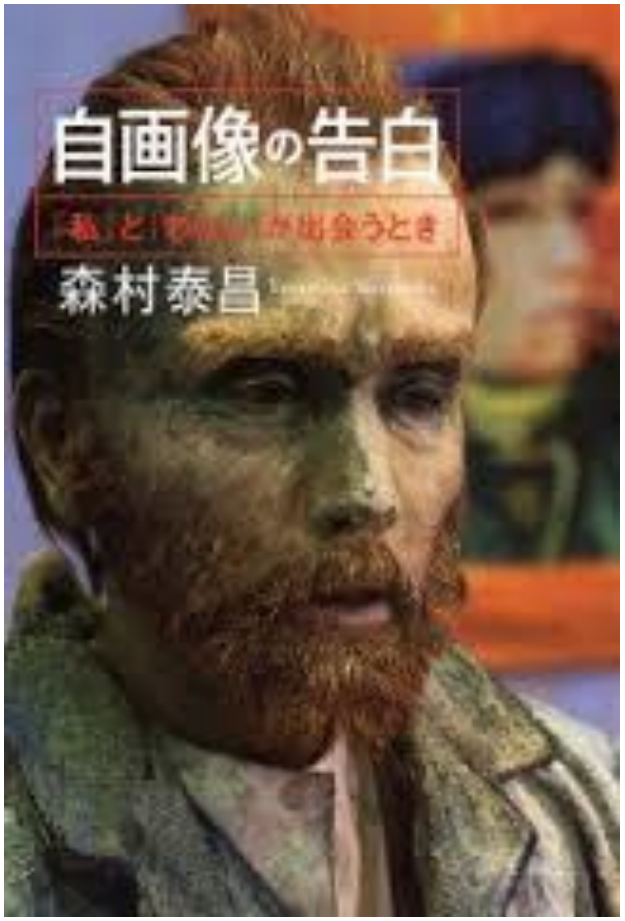
『坊主としての自画像』。1888年9月。(F 476)。[

Self-portrait with bandaged ear 1889
Vincent van Gogh

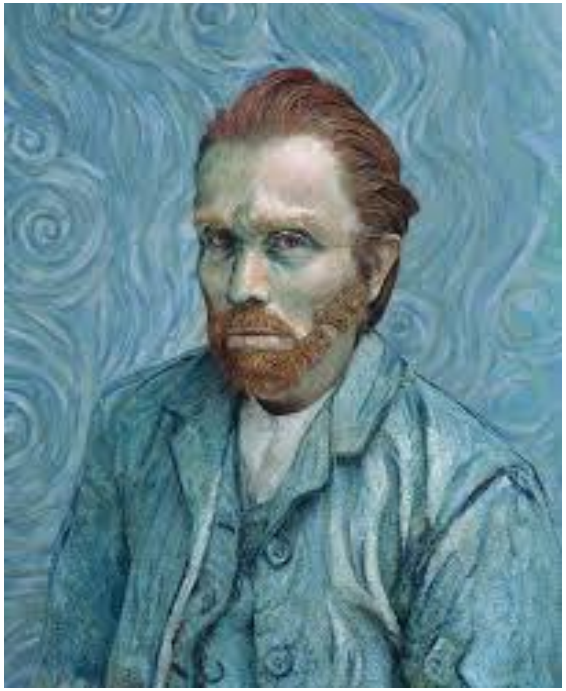
森村泰昌《肖像（ゴッホ）》(1985年
国立国際美術館蔵)


自画像の告白
「私」と「他者」が出会うとき
森村泰昌




自画像の告白
「私」と「他人」が出会うとき
森村泰昌

森村泰昌
自画像＝美術史
「私」と「他人」が出会うとき
国立国際美術館
2016年4月5日(火)～6月19日(日)



- 音もせで思ひにもゆる蛍こそ啼く虫よりも哀れなりけれ
源重之
- Not making even a sound [yet] burning with desire,--for this the firefly indeed has become more worthy of pity than any insect that cries.

- わたしとしては、こんな考えを払いきれないでいる。ーー物質はなんらかの方法で誤りなくただひたすらに記憶している、そして生命存在のいかなる小さな単位の中にも、無限の潜在的可能性がひそんでいる、その理由は単純で、あらゆる究極の微小の原子にはすでに消滅した幾億兆の宇宙の無限な不滅の経験が宿っているからである。

- ラフカディオ・ハーン「螢」 小泉八雲『骨董・怪談』
- 平川祐弘訳、2014年、107, 112頁。

「多くの親しい顔の特徴から形づくられた、思い出によって重ね焼きsuperimposedされた像、愛情により混ぜあわされinterbrended ,ひとつの幽霊のような人格となった(…)　追憶の合成体　composite of recollections.」

Lafcadio Hearn, «A Ghost » *Harpers Monthly*, 1889

cf. « in the Cave of the Children's Ghost » (ca. 1890);

Glimpses of Unfamiliare Japan, 1894

「子供たちの死霊の岩屋で—加賀の潜戸」

Sir Francis Galton、(1822 – 1911) « composite portrait » (1879)　集合的肖像 « portrait of type and not of individual » 複数の写真の重複焼き付け

ダーウィンの進化論の影響を受け、心的遺伝への興味から出発し、人間能力の研究、優生学(eugenics : 1863)、相関研究を含む統計的研究法を発達させ、「平均への回帰」を記述、競馬の着予想における「ダルトンの法則」も。

著書『遺伝的天才』(*Hereditary Genius*、1869)の中で、彼は人の才能がほぼ遺伝によって受け継がれるものであると主張した。

- 「ヘルン氏は万象の背後に心霊の活動を見るといふやうな一種深い神秘思想を抱いた文学者であつた。氏は我々の単純なる感覚や感情の億に過去幾千年来の生の脈拍（博）を感じたのみならず、肉体的表情の一々の上にも祖先以来幾世代の霊の活動を見た。我々の人格は我々一代のものではなく、祖先以来幾代かの人格の複合体である。我々の肉の底には祖先以来の生命の流れが波立つて居る。我々の肉体は無限の過去から現世に連るはてなき心霊の柱のこなたの一端に過ぎない。斯して、彼はメキシコ湾の雄大なる藍の色に、過去幾世の楽しき夏の日の碧空を想ひ、熱帯の夕、天を焦す深紅の光に、過去幾世の火山の爆発や林火の狂焔を感じ、面変わりゆく我子の顔に亡き父母や祖父母の霊の私語を聞き、恋人と握手のfrissonには、幾世輪廻の因縁を偲んだ。…」

- 西田幾多郎、「小泉八雲氏の思想」、第一書房版『小泉八雲全集』第4巻「仏の畠の落穂」他収録、別冊、10頁、1928年、追って「小泉八雲伝」『西田幾多郎全集』第1巻、1965年、410－413頁。

「一即多、多即一」「相即相入」
「重重無尽」　　華厳教学
「我は我のみならず、我はおよそ
存在するすべてのものの起源で
ある、我は全てに等しく、我なく
しては紙もまた存在しない」。
マイスター・エックハルト

中井宗太郎『近代芸術概論』1922年

森村泰昌、Yasumasa Morimura
批評とその愛人，1989　静岡県立美術館
The Critique and his Lover(s)

Paul Cézanne, *Nature-morte aux pommes et aux oranges,* 1895　Le Musée d'Orsay, Paris

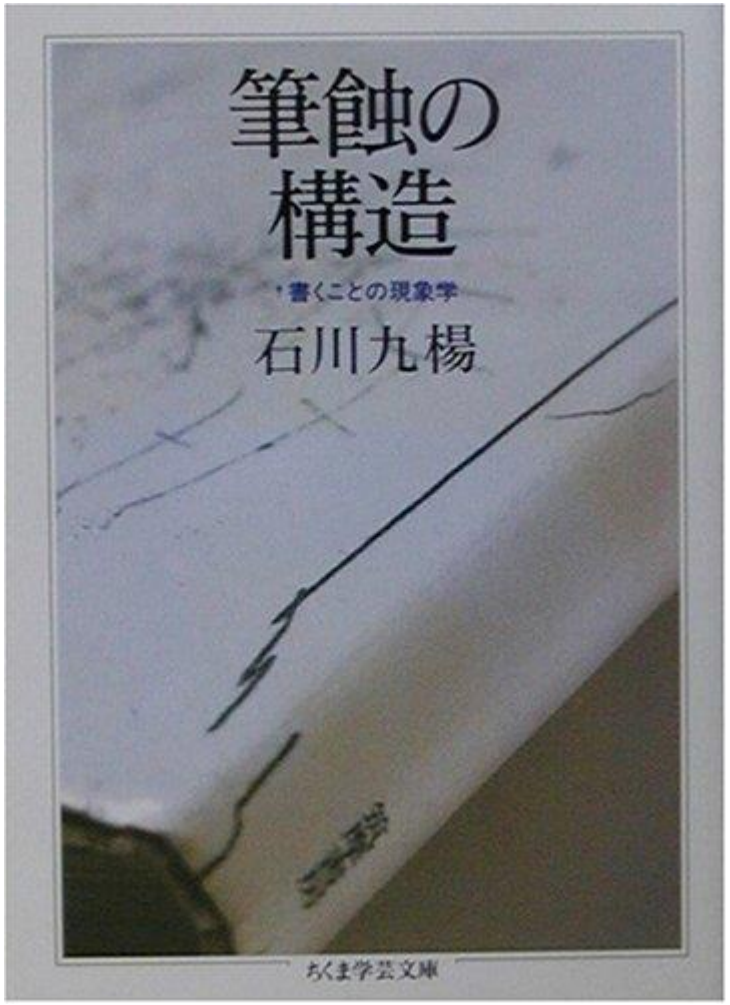
森村泰昌《侍女たちは夜に甦る　V:
遠くの光に導かれた闇に目覚めよ》2013年

ベラスケス 《宮廷の侍女たち》
1656年　油彩　318×276cm
所蔵:プラド美術館／スペイン

稲賀繁美「「私」と「わたし」が
であうとき―あるいは双子の
幽霊：輪廻転生説と複数宇宙論
から」『国立国際美術館ニュース』
214号、2016年6月、2－3頁。

森村泰昌《侍女たちは夜に甦る　V：
遠くの光に導かれた闇に目覚めよ》2013年

マウリシオ・デ・ソーザ
The Maids of the Gang 1993 年　油彩　110x95cm
作家蔵



石川九楊『中国書史』 京都大学出版会、1996, ミネルヴァ書房、著作集別巻、刊行予定 (解説：稲賀繁美）『筆蝕の構造』1992；ちくま学芸文庫、2003年

- 王羲之　蘭亭序　353年？
- 六朝時代：草書：二折法　筆触　自然書法
- 　　行書一草書の正書体化する過程
- 初唐時代：楷書：三折法　筆蝕　基準書法

筆触　紙　筆　墨　　陽筆　草書

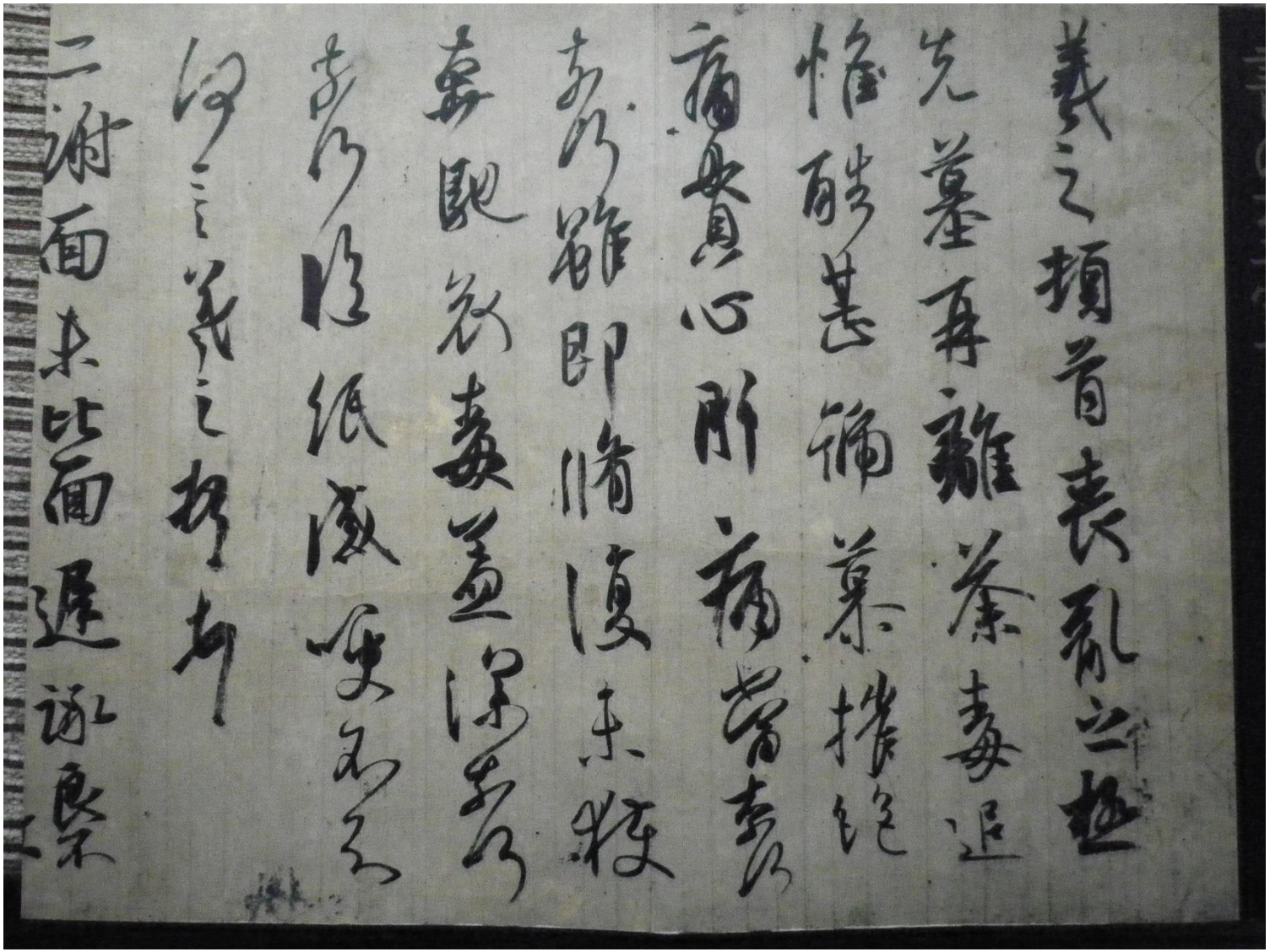
竹簡・木簡

筆蝕　石　鑿　影　　陰刻　隷書

甲骨文字　篆書

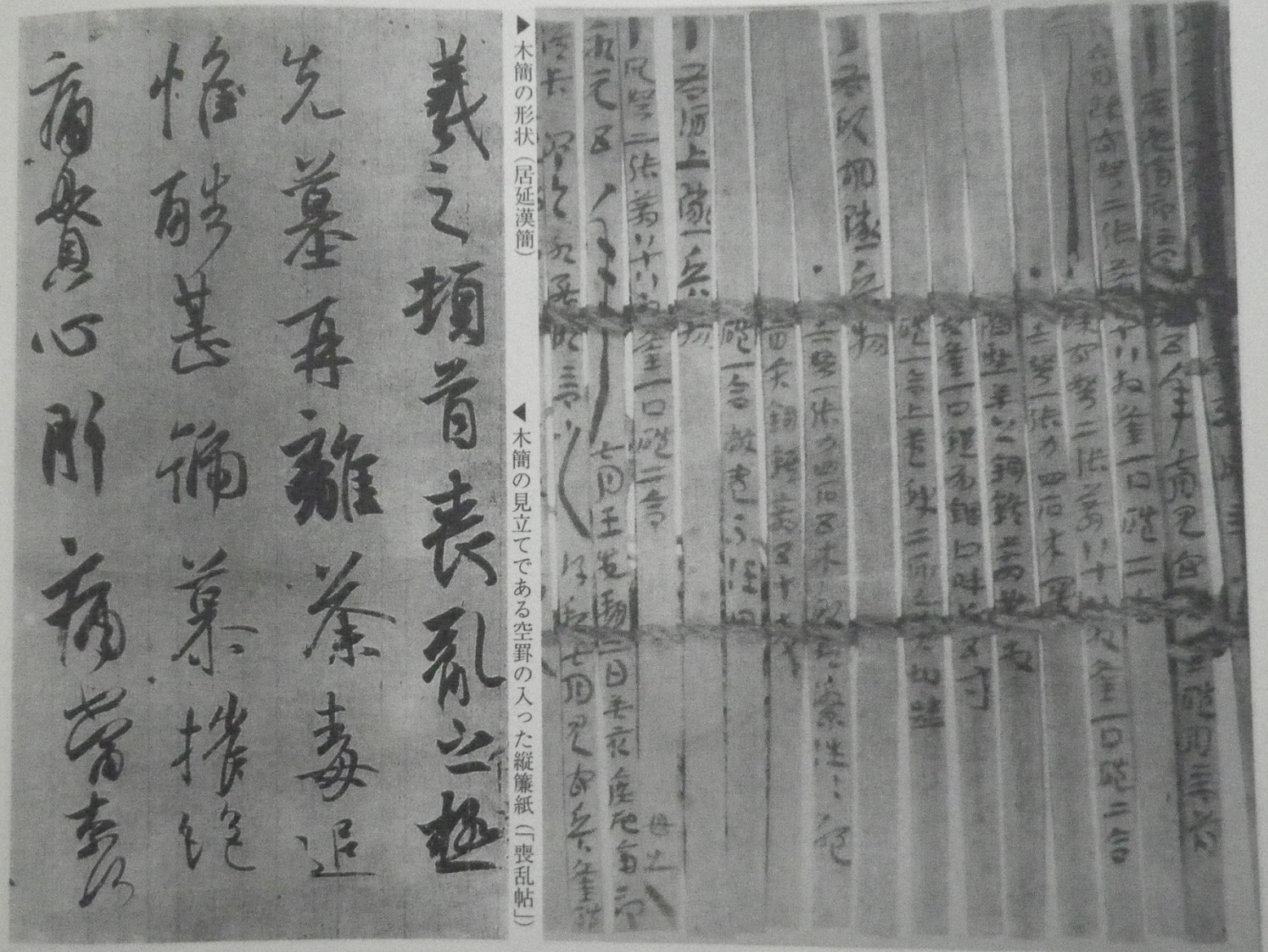
- 「紙の深層には石が埋まっている」「石と紙との闘争史」 弁証法
- 「書くこと」の現象学/考古学・方法的アナクロニズム
- 碑に文字を刻む＝歴史の生成⇔刻印から歴史を遡る。
- 祖先の技＝行の「なぞり書き」による再発見

草書-楷書の振幅、正書体の確立 （六朝-北魏-初唐　350-650）
正書体への行・草の浸潤 （唐代から宋代へ:650-1100）
明末の「連綿草」から清中期の篆書への復古（明末-清中期1100-1750）



王羲之 『喪乱帖』
東京　三の丸肖像館

おうぎし、拼音: Wáng Xīzhī、303年 - 361年]）



▶木簡の形状（居延漢簡）

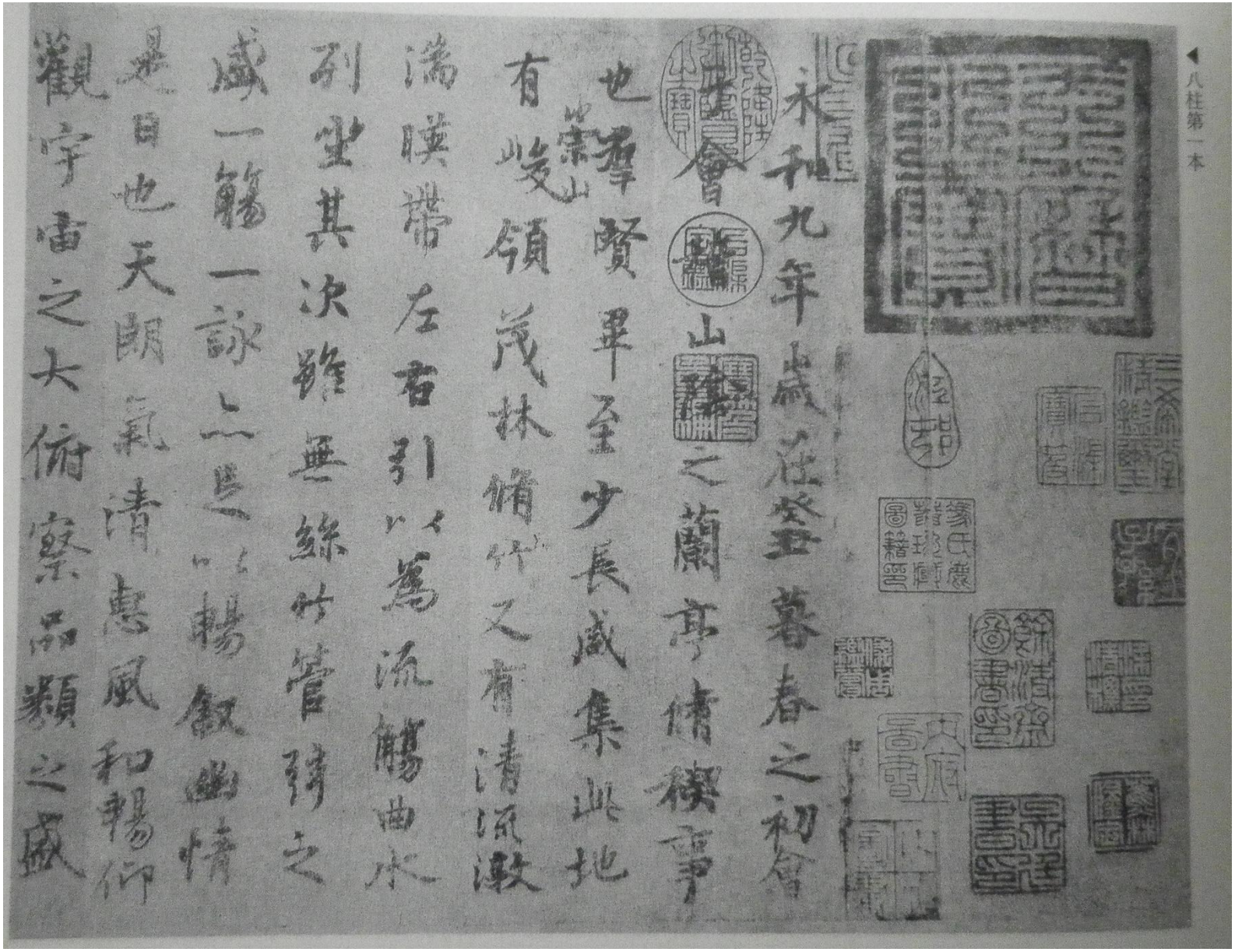
◀木簡の見立てである空罫の入った縦簾紙（「喪乱帖」）

第6章　紙の出現で書はどう変わったのか/ 〈筆触〉と〈筆蝕〉 96頁

- 王羲之　　蘭亭序　353年？　原本喪失
- 北京・故宮博物館
- 　八柱第三本: 「奇想天外のヒゲ蘭亭」
- 　八柱第二本:宋代「三折法」 楷書
- 　八柱第一本:「双胴の怪獣」「合成体」
- 　　転写時の唐代書法＋六朝書法

遺品の痕跡から空位・不在の起点を復元する。

唐・太宗の「政治力」: 「蘭亭序」 超歴史的規範一後世を自らの呪縛からも解放する「亡霊」



八柱第一本張金世奴本

王羲之 「蘭亭叙」358年　真筆の不在　唐代に忽然と「出現」
第10章、双頭の怪獣　王羲之「蘭亭叙」後編、119頁

王羲之　Wáng Xīzhī、303年 - 361年]
「蘭亭叙」
　双鉤填墨（そうこうてんぼく）
Shuang-gou-tian-mo

八柱第三本:
　　「奇想天外のヒゲ蘭亭」

八柱第二本:宋代「三折法」 楷書

八柱第一本:
　「双胴の怪獣」「合成体」
　転写時の唐代書法＋六朝書法

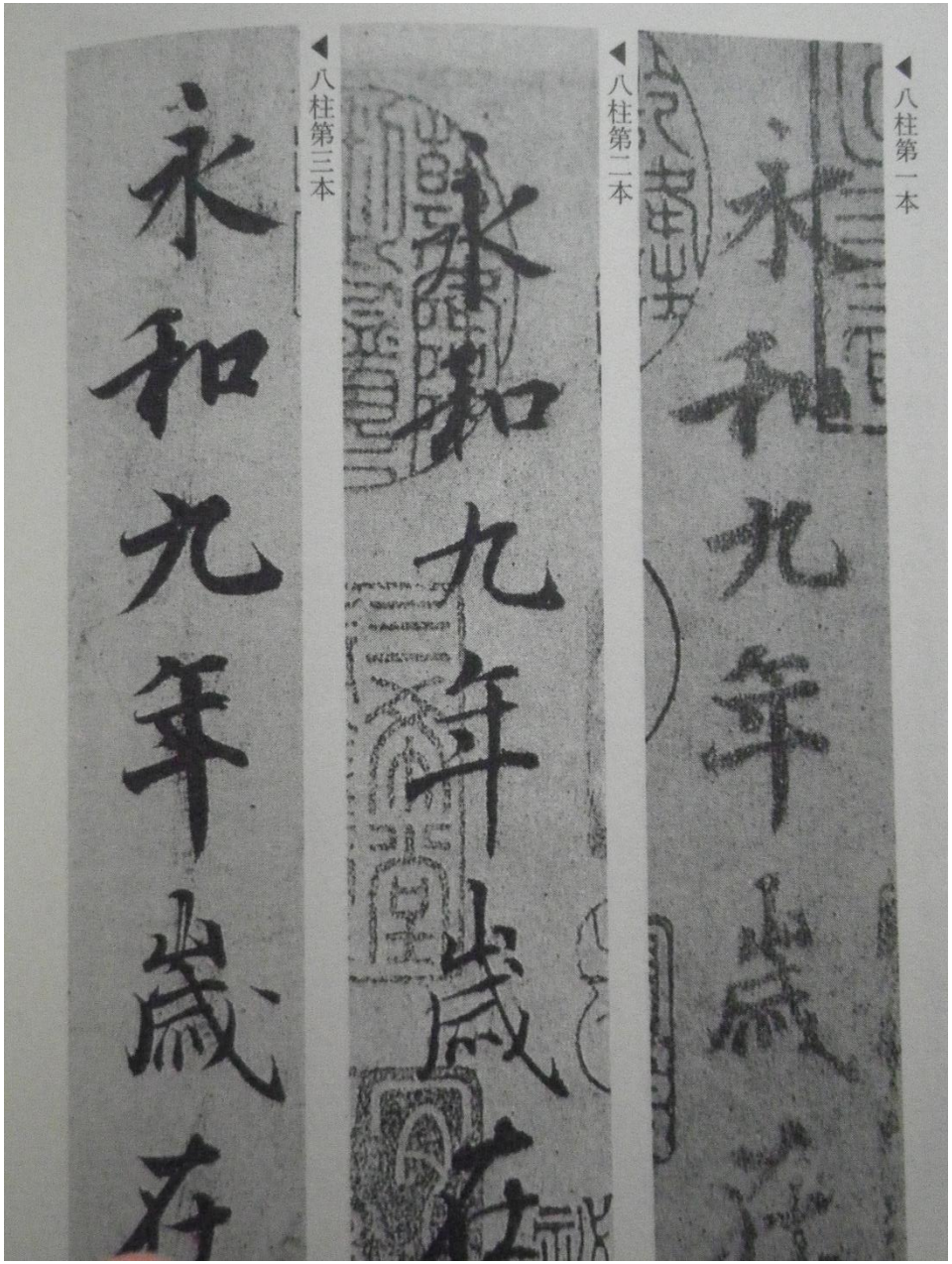
中国で文字を写し取る方法の一つ。写そうとする文字の上に薄い紙を載せて謄写するもので，最初に輪郭だけを線で写し (双鉤)，中に墨を補填 (填墨) する方法をいう。六朝時代に行われていたが，唐代になって法書の鑑賞の発達に伴って，王羲之などの法書の搨模 (とうも) に用いられた。

王羲之Wáng Xīzhī、303年 - 361年]
「蘭亭叙」
双鉤塡墨（そうこうてんぼく）
Shuang-gou-tian-mo

八柱第三本：「奇想天外のヒゲ蘭亭」

八柱第二本：宋代「三折法」 楷書

八柱第一本：「双胴の怪獣」「合成体」
転写時の唐代書法＋六朝書法



中国で文字を写し取る方法の一つ。写そうとする文字の上に薄い紙を載せて謄写するもので，最初に輪郭だけを線で写し (双鉤) ，中に墨を補填 (填墨) する方法をいう。六朝時代に行われていたが，唐代になって法書の鑑賞の発達に伴って，王羲之などの法書の搨模 (とうも) に用いられた。

第8章　双頭の怪獣　王羲之「蘭亭叙」前編
107頁

王羲之　Wáng Xīzhī、303年 - 361年]
「蘭亭叙」
双鉤填墨（そうこうてんぼく）
Shuang-gou-tian-mo

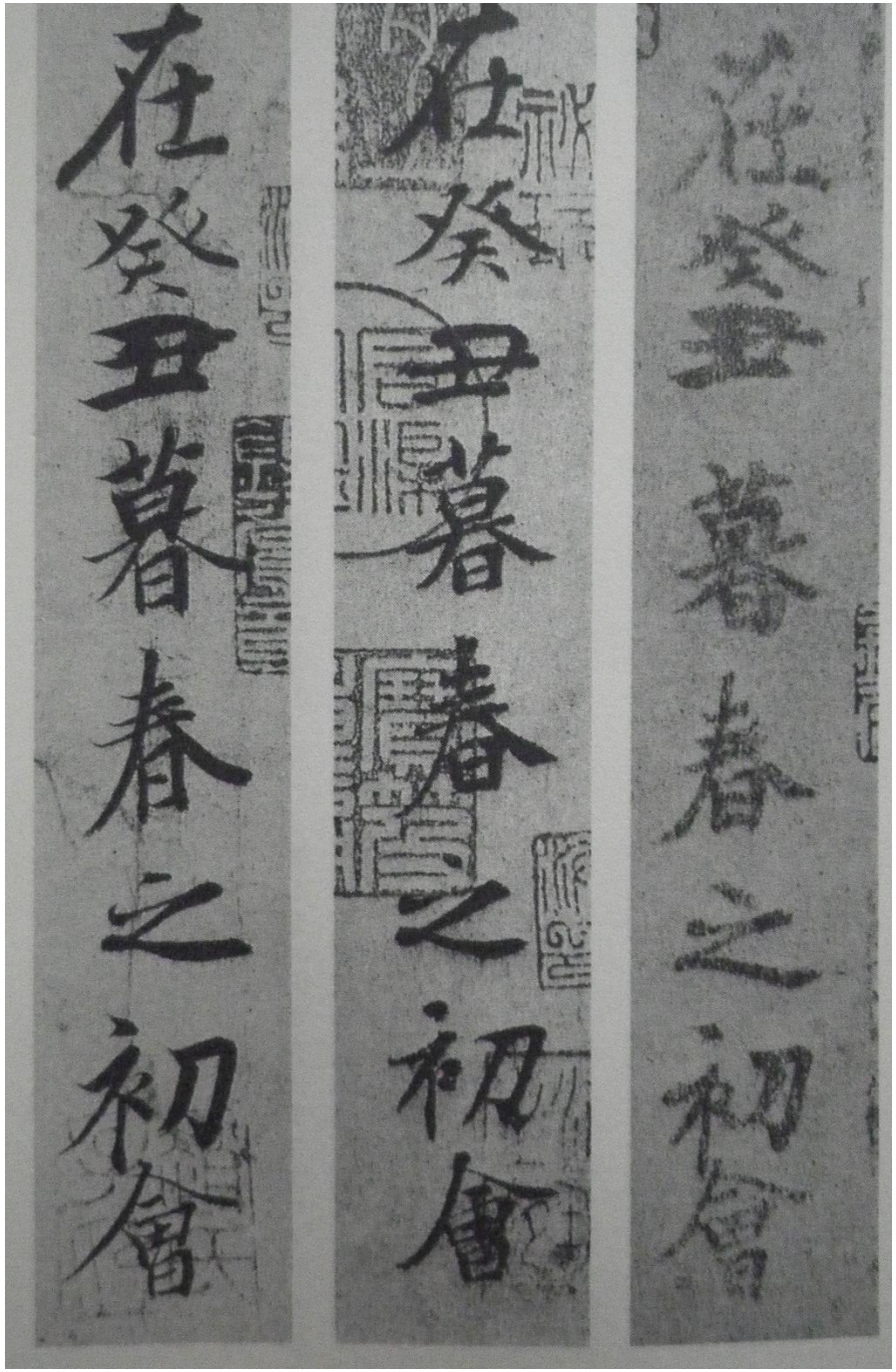
八柱第三本：「奇想天外のヒゲ蘭亭」

八柱第二本：宋代「三折法」 楷書

八柱第一本：「双胴の怪獣」「合成体」
転写時の唐代書法＋六朝書法

中国で文字を写し取る方法の一つ。写そうとする文字の上に薄い紙を載せて謄写するもので，最初に輪郭だけを線で写し (双鉤)，中に墨を補填 (填墨) する方法をいう。六朝時代に行われていたが，唐代になって法書の鑑賞の発達に伴って，王羲之などの法書の搨模 (とうも) に用いられた。

第8章　双頭の怪獣　王羲之「蘭亭叙」前編
107頁



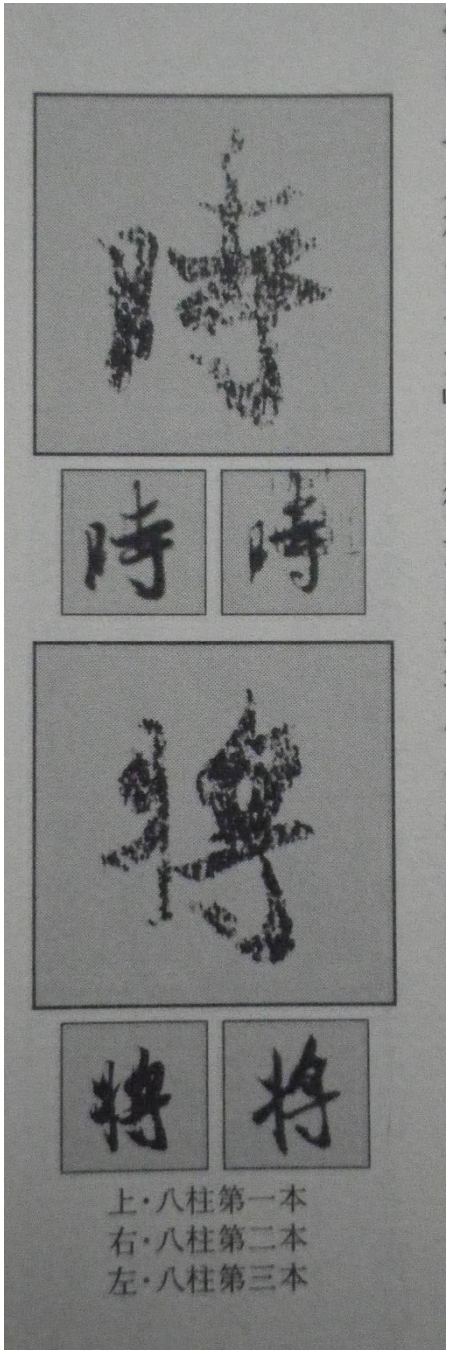
王羲之 「蘭亭叙」
　双鉤塡墨（そうこうてんぼく）
Shuang-gou-tian-mo

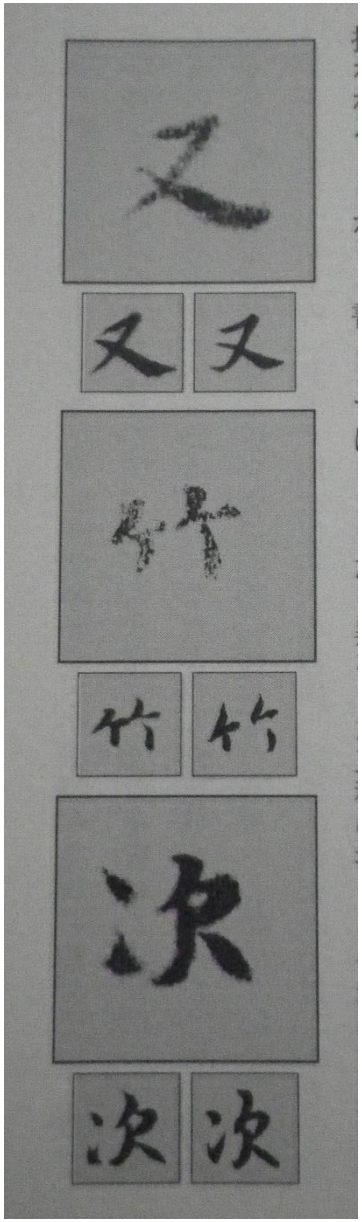
　八柱第三本: 「奇想天外のヒゲ蘭亭」

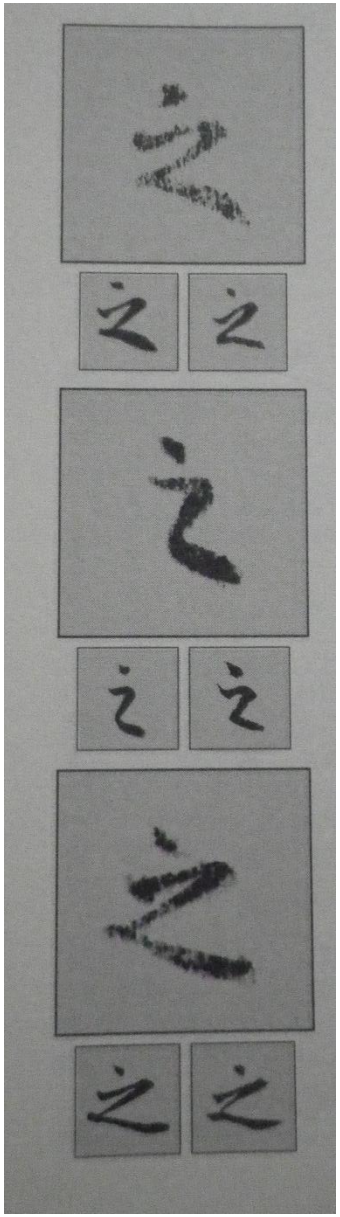
　八柱第二本:宋代「三折法」 楷書

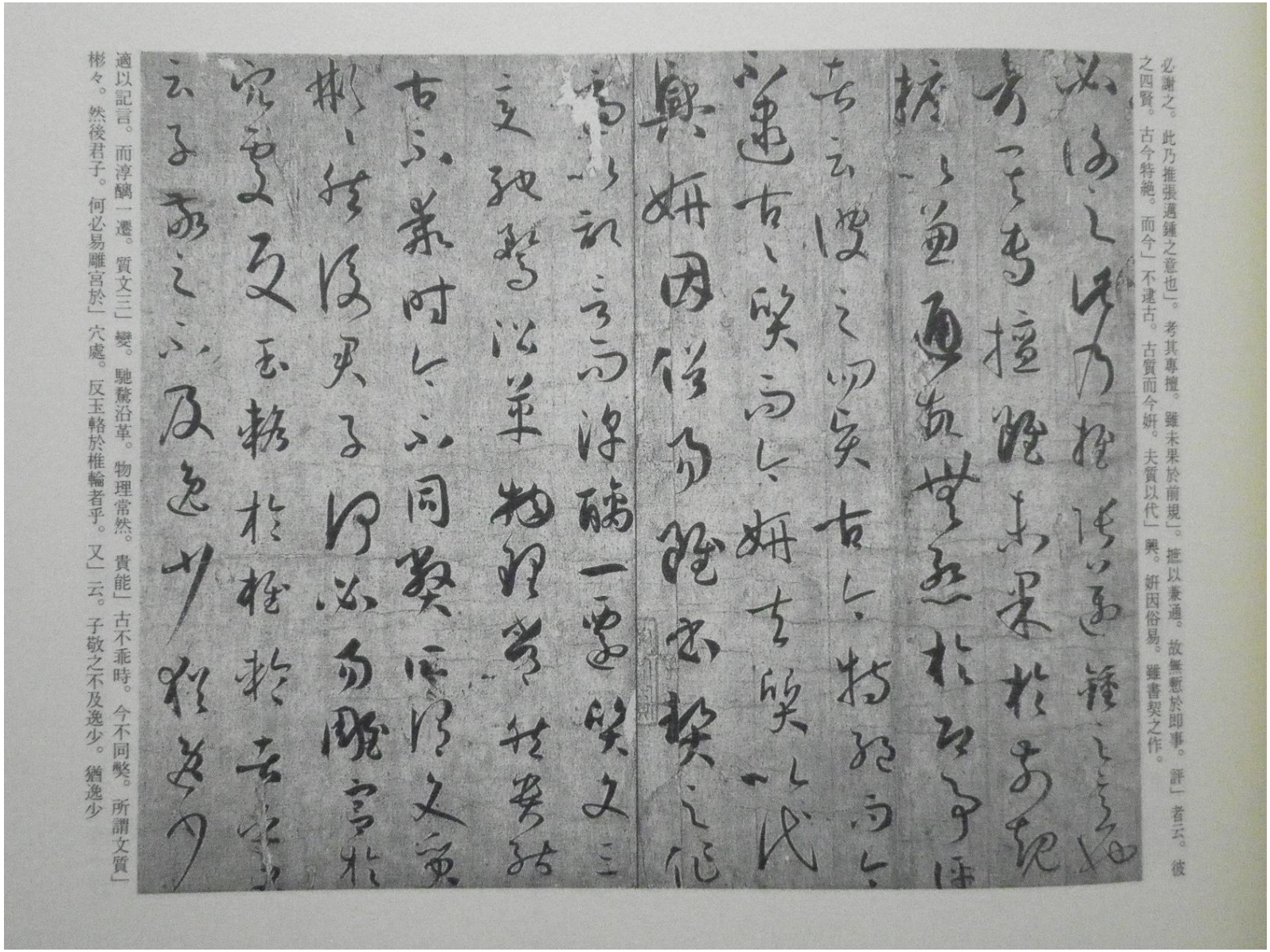
　八柱第一本:「双胴の怪獣」「合成体」
　　転写時の唐代書法＋六朝書法

第10章、双頭の怪獣
後編、121ー123頁







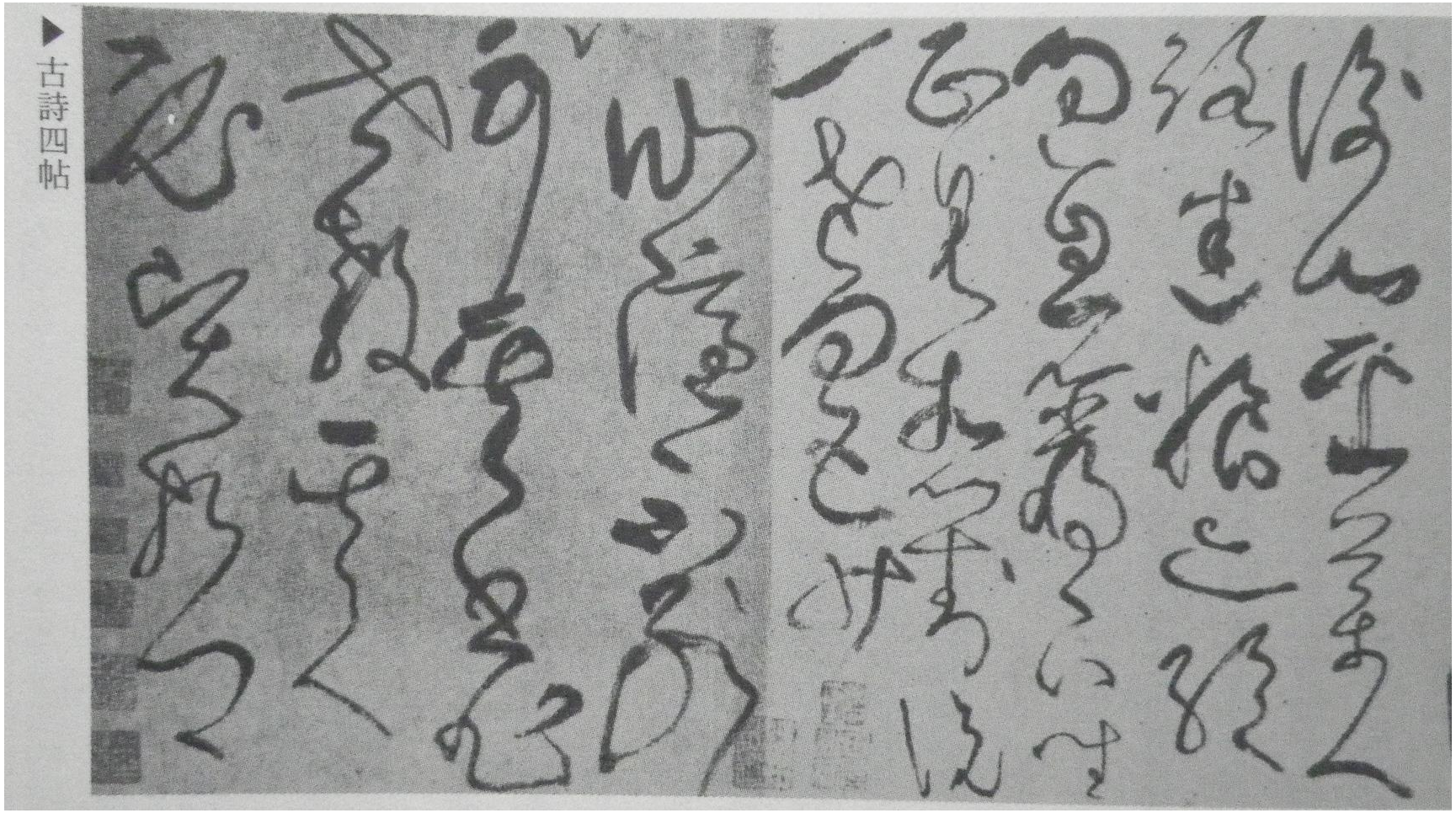


必謝之。此乃推張邁鍾之意也」。考其專擅。雖未果於前規」。擅以兼通。故無慙於即事。評」者云。彼之四賢。古今特絶。而今」不逮古。古質而今妍。夫質以代」興。妍因俗易。雖書契之作。

適以記言。而淳醨一遷。質文三」變。馳騖沿革。物理常然。貴能」古不乖時。今不同弊。所謂文質」彬々。然後君子。何必易雕宮於」穴處。反玉輅於椎輪者乎。又」云。子敬之不及逸少。猶逸少

孫過庭 「書譜」
第20章、巨大なる反動/ 191頁

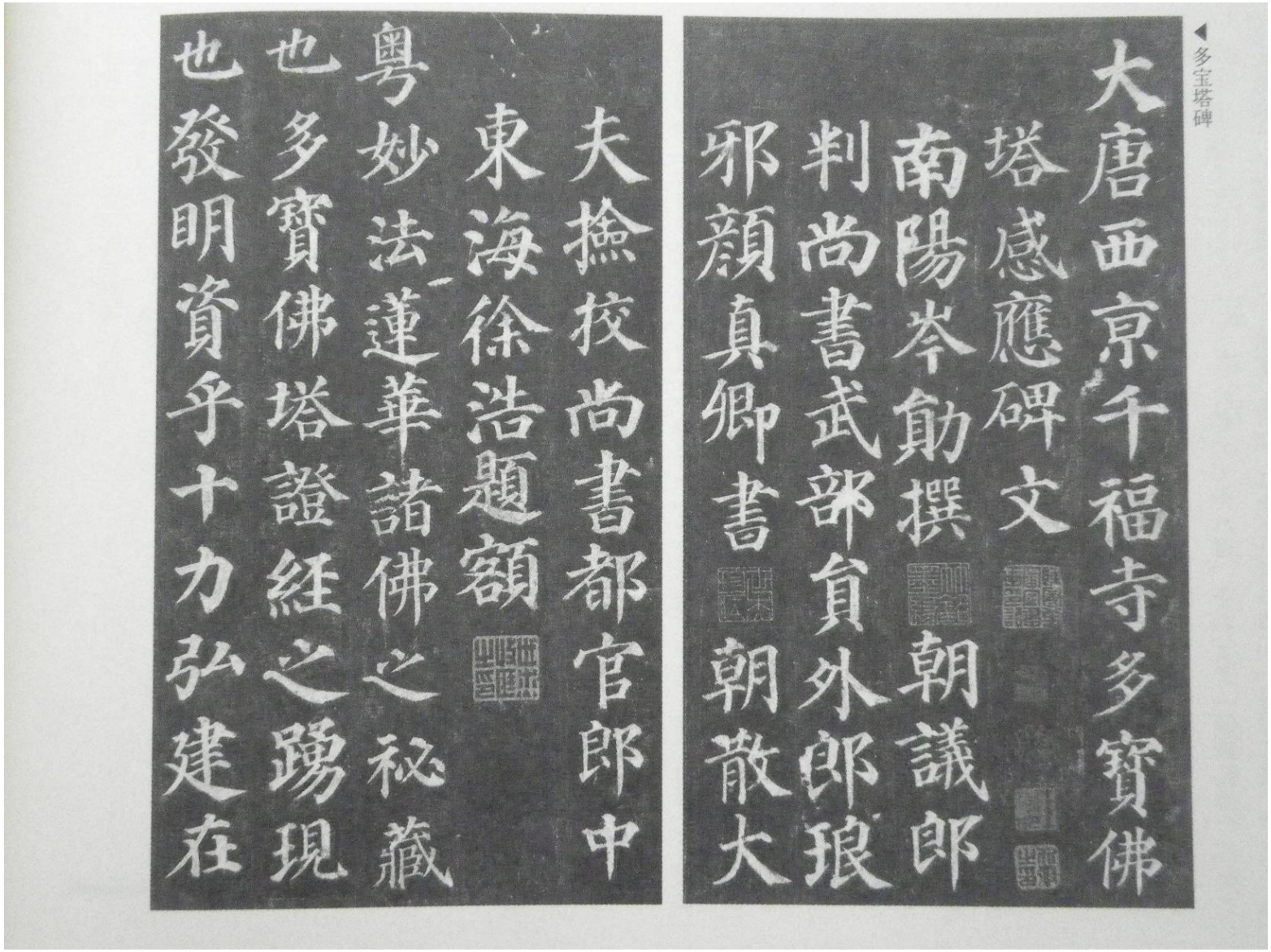
（孙过庭 Sun Guoting
そん かてい、648年 - 703年）



張旭 「古詩四帖」
第21章 「文体＝書体の嚆矢」199頁

（ちょう きょく、Zhang Xu生没年不詳）
中国・唐代中期

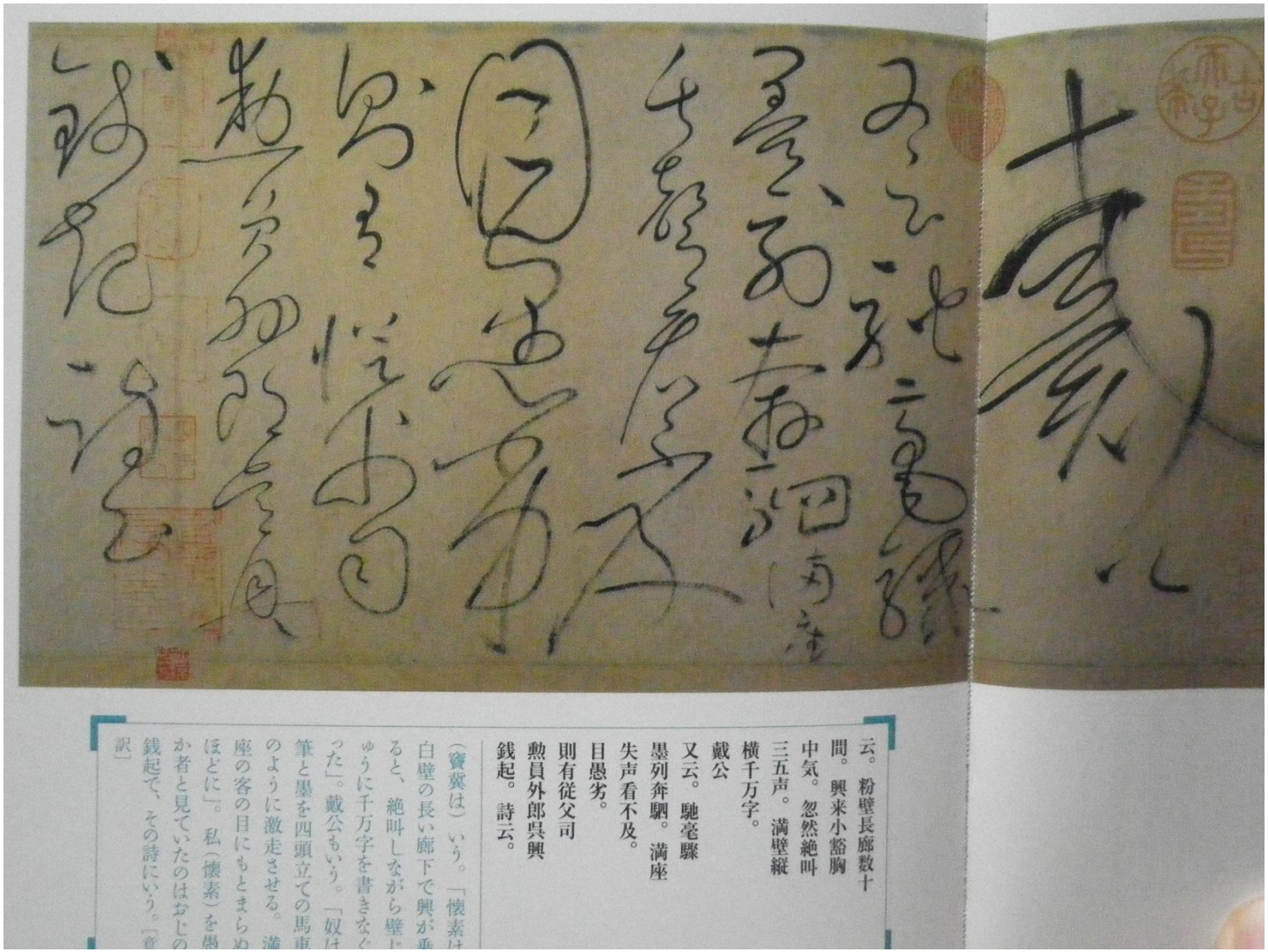
「狂書」



顔真卿 「多宝塔碑」
第23章 「口語体楷書の誕生」218頁
「類型」の成立

（がん しんけい、Yán Zhēnqīng
709年（景龍3年）- 785年（貞元元年））

類型を逸脱した 蛇行」



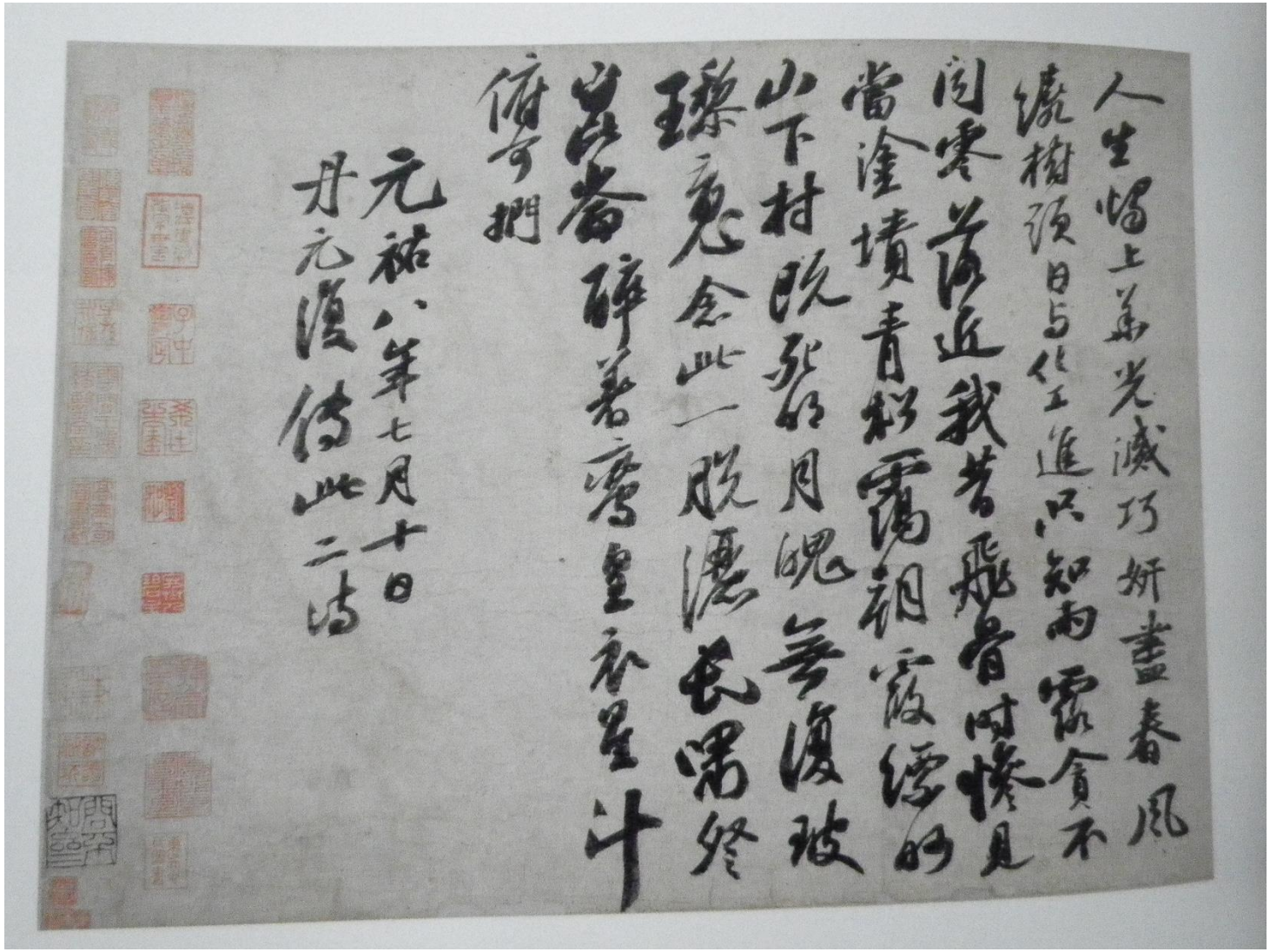
云。粉壁長廊数十
間。興来小豁胸
中気。忽然絶叫
三五声。満壁縦
横千万字。
戴公
又云。馳毫驟
墨列奔駟。満座
失声看不及。
目愚劣。
則有従父司
勲員外郎呉興
銭起。詩云。

（竇冀は）いう。「懐素は
白壁の長い廊下で興が乗
ると、絶叫しながら壁に
ゆうに千万字を書きなぐ
った」。戴公もいう。「奴は
筆と墨を四頭立ての馬車
のように激走させる。満
座の客の目にもとまらぬ
ほどに」。私（懐素）を愚
か者と見ていたのはおじの
銭起で、その詩にいう。［意
訳］

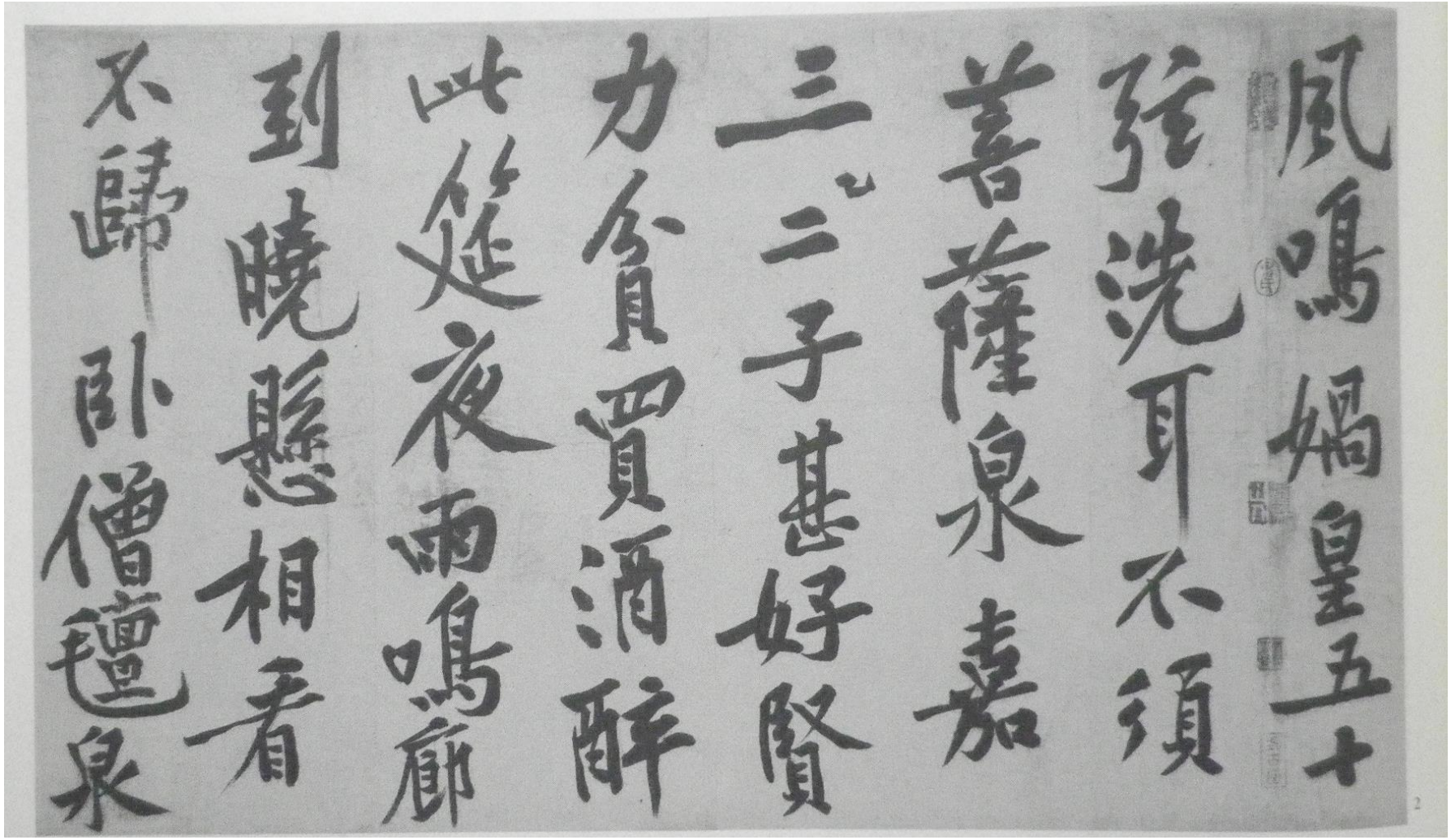
懐素　Huáisù, 737–799「自叙帖」　第22章 「歓喜の大合唱」206－207頁
国立故宮博物院　台北、ﾄﾝﾎﾞの本、四二－四三頁　代宗の大暦12年（777年）

逸脱と
不均衡

蘇軾　Sū Shì、
景祐3年12月19日
（1037年1月8日）
- 建中靖国元年
- 7月28日
- （1101年8月24日

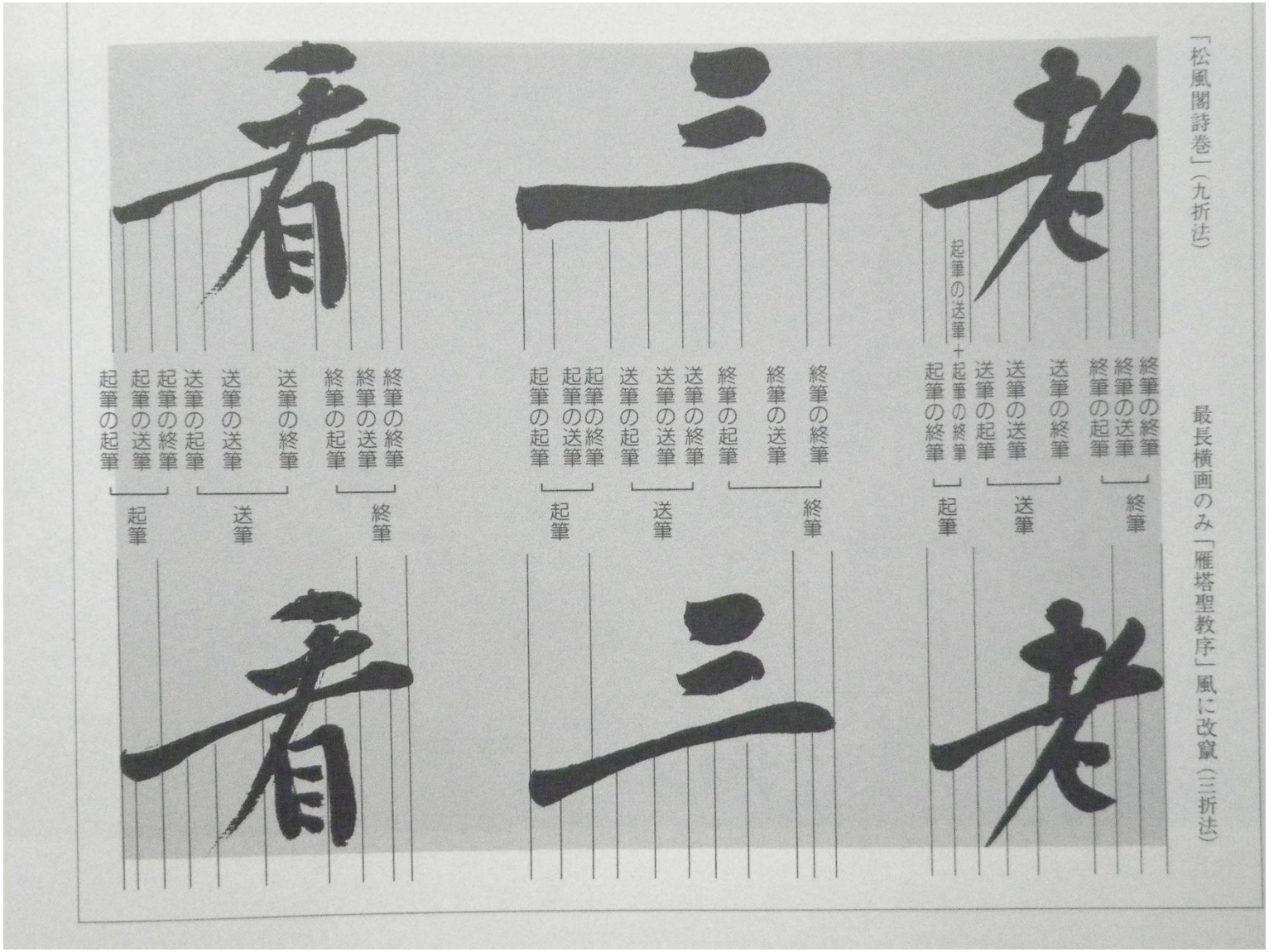


蘇軾　（1036年（景祐3年）ー1101年（建中靖国元年））「黄州寒食詩巻」
「李白仙詩」大阪市立美術館　重要文化財、『王羲之から空海へ』2016・38
第二四章「〈無力〉と〈強力〉の間」 236頁。



黄庭堅 「松風閣詩巻」 236－237頁
第二五章 「書の革命」
「歯切れ」のよさ･と「粘着」と

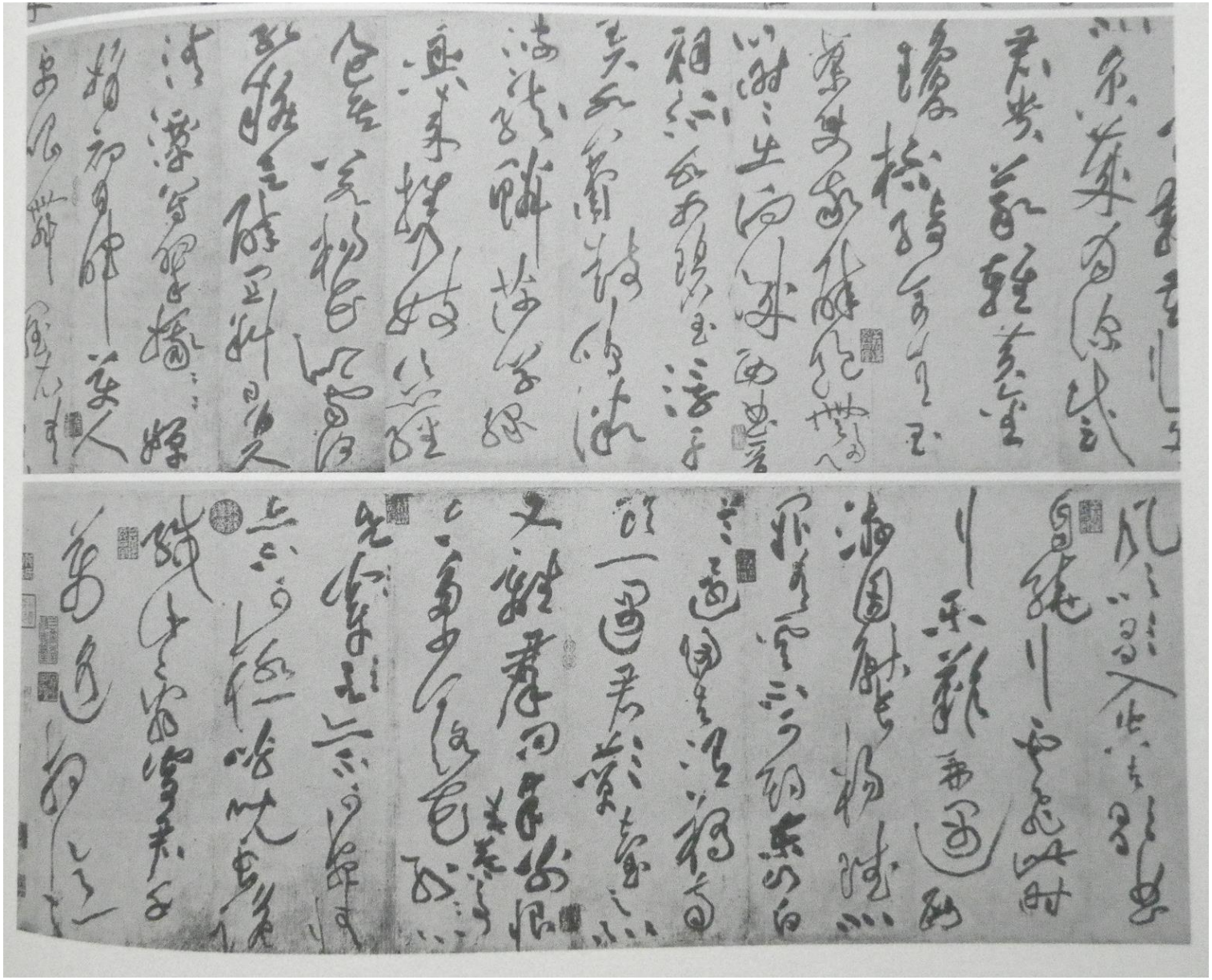
こう ていけん、Huang Tingjian
慶暦5年（1045年）- 崇寧4年9月30日（1105年11月8日））



第二五章　黄庭堅　「松風閣詩巻」

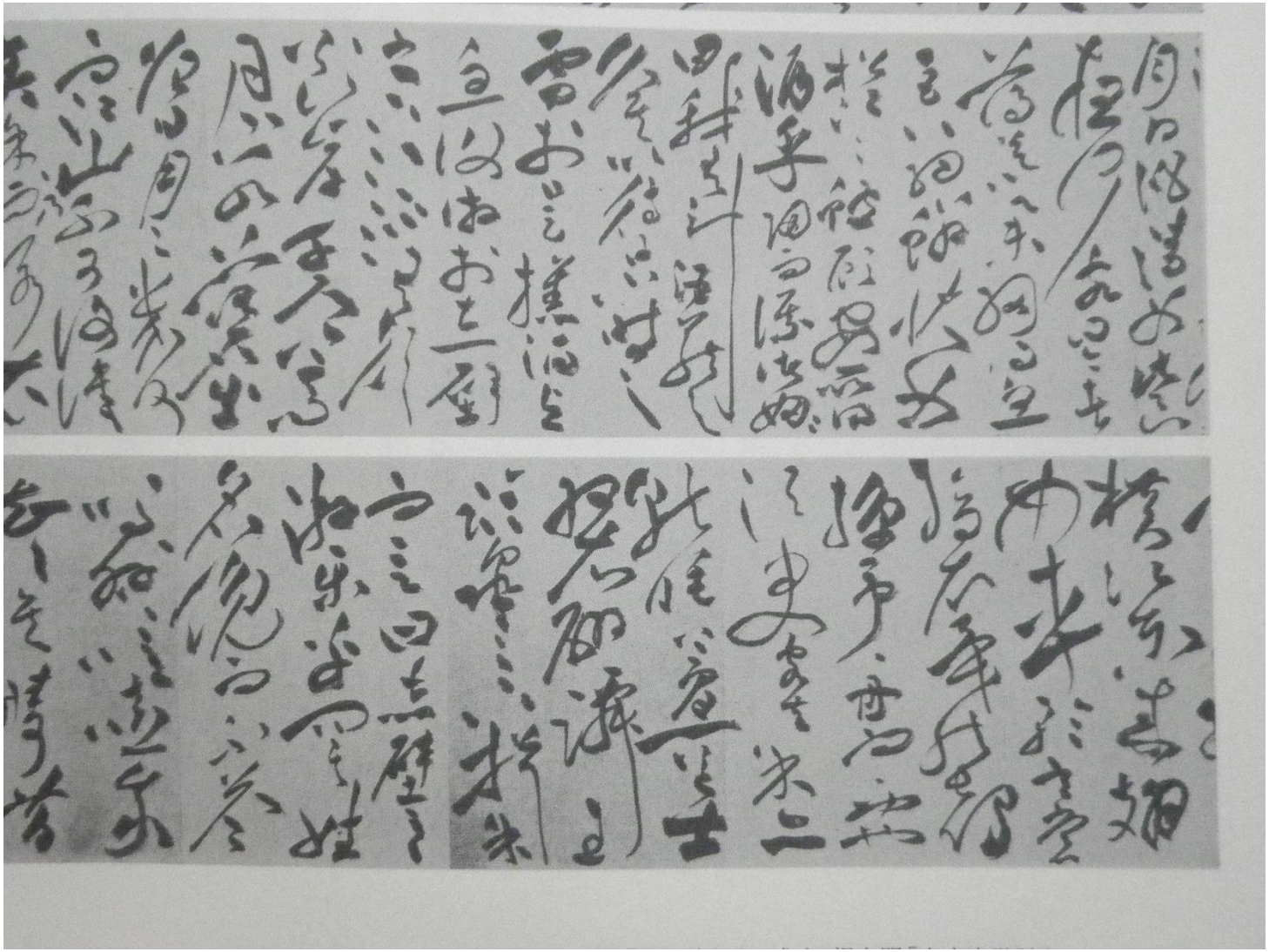
第二五章「書の革命」 238頁

歯切れ」のよさ、とは対照的な 粘着」性



黄庭堅　「李白懐旧遊詩巻」 Huang Tingjian （1045ー1105年）
第二六章 「粘土のような世界を掘り進む」246頁

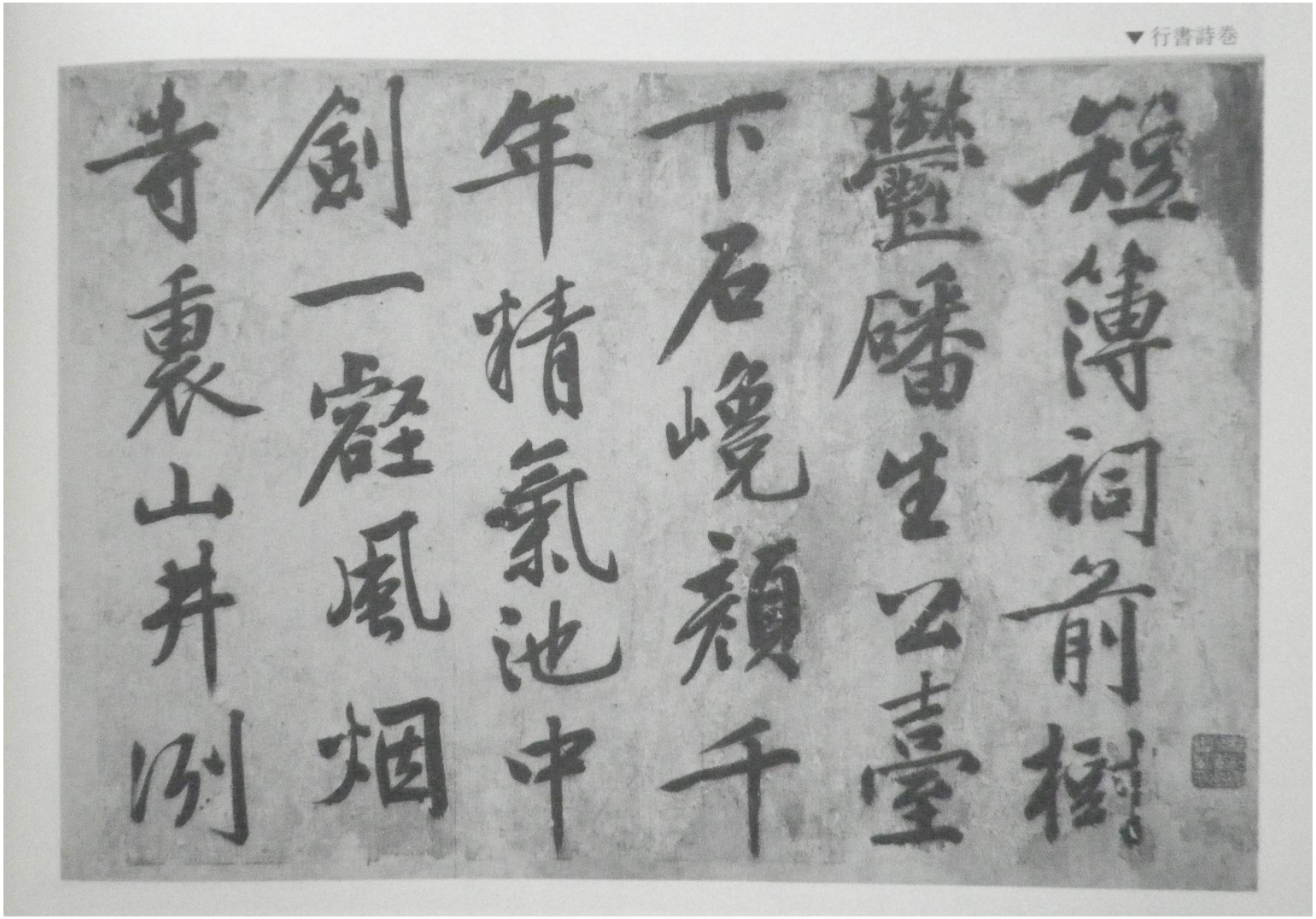
「ひねり」と「ねじれ」



祝允明 「大字赤壁賦」　　Zhù Yǔn míng 1460-1526

第三十章 「角度筆触の成立」274頁　　ひねりとねじれ

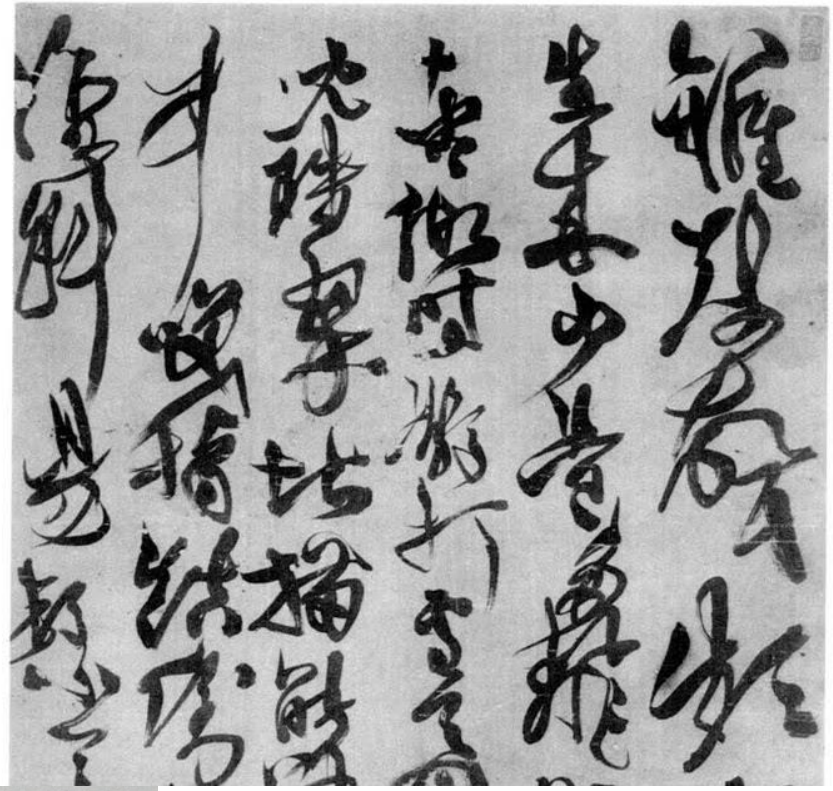
黄庭堅の宋代の書への思慕と
遅れてきた元代からの過去の　夢追い」

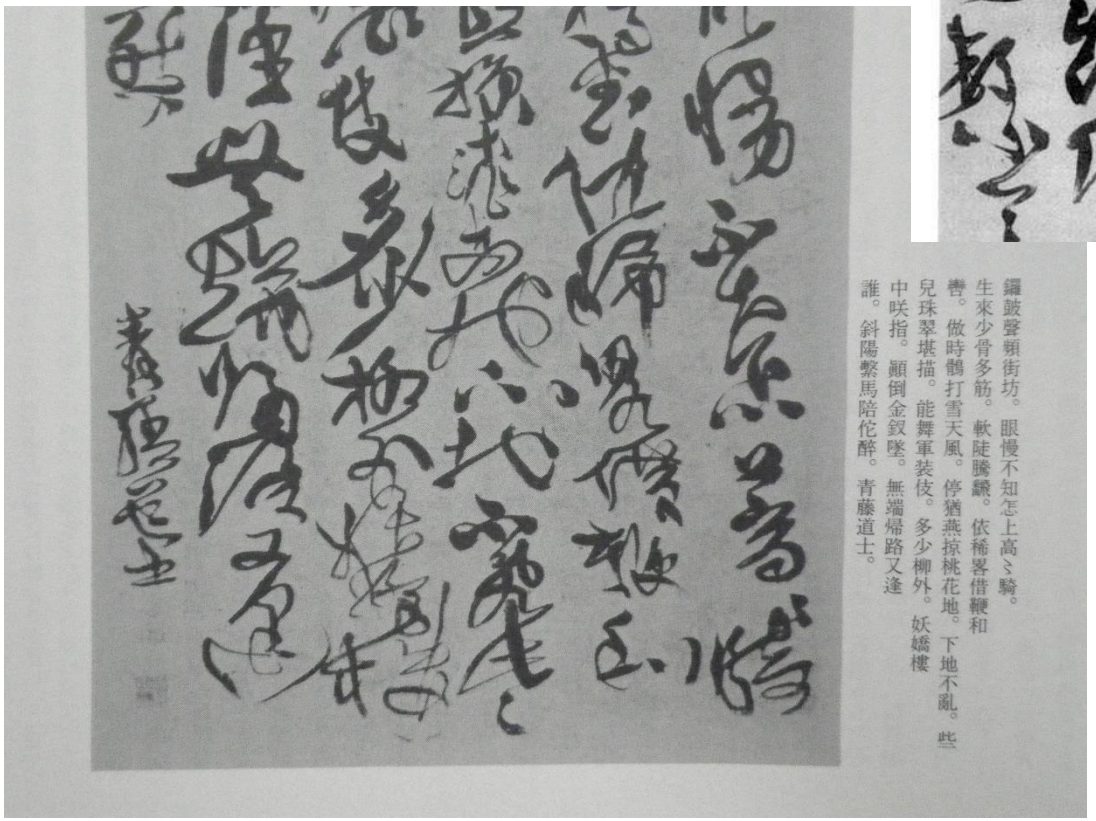


文徴明　「行書詩巻」
第三一章 「夢追いの書」282頁

Wen Zhengming (1470–1559),
成化6年11月6日（1470年11月28日）-
嘉靖38年2月20日（1559年3月28日）

「戦乱場の無頼」



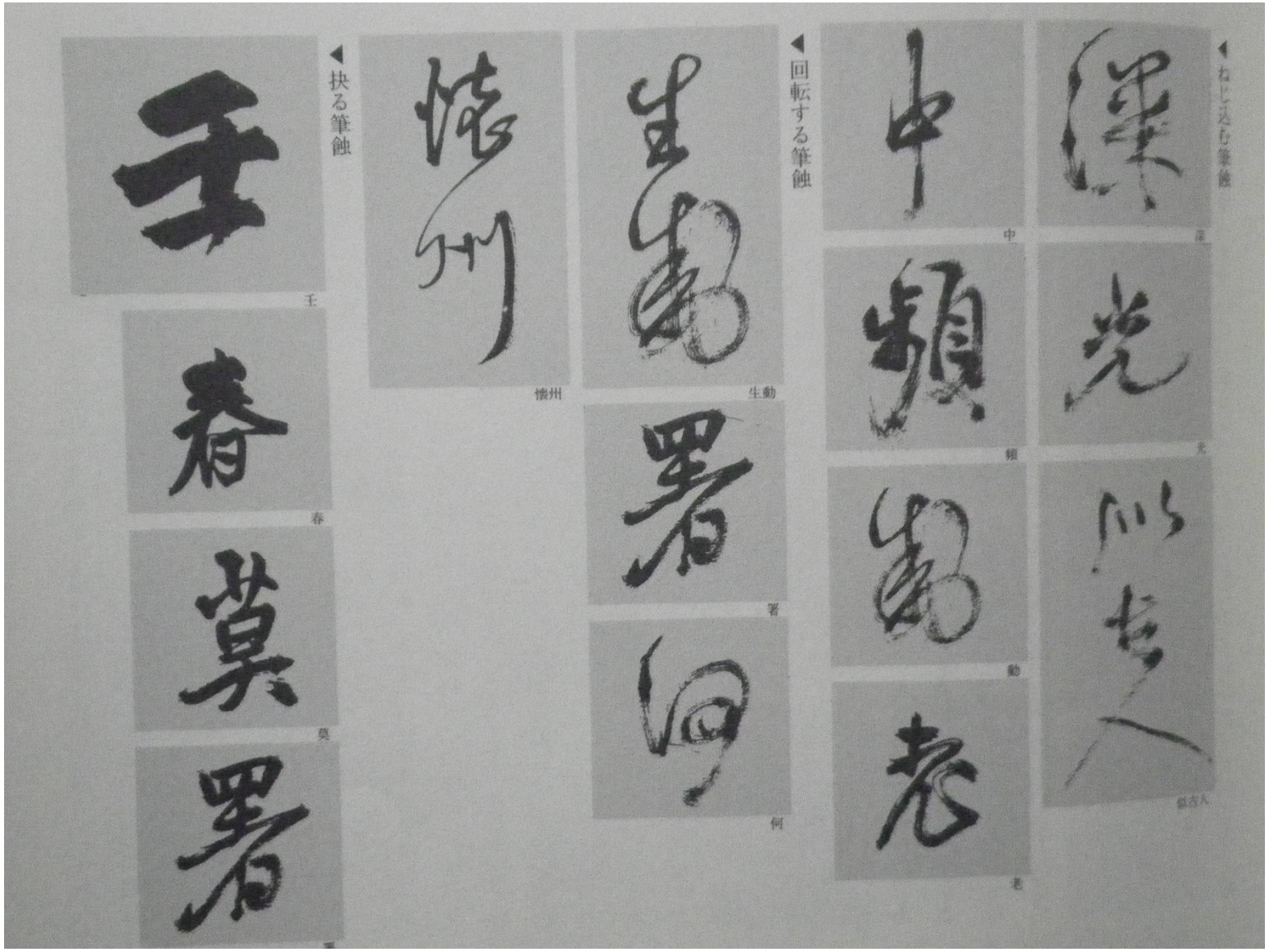


鑼鼓聲頻街坊。眼慢不知怎上高ゝ騎。
生來少骨多筋。軟韮騰驤。依稀畧借鞭和
轡。做時鶻打雪天風。停猶燕掠桃花地。下地不亂。些
兒珠翠堪描。能舞軍裝伎。多少柳外。妖嬌樓
中咲指。顛倒金釵墜。無端帰路又逢
誰。斜陽繫馬陪佗醉。青藤道士。

徐渭　Xú Wèi
正徳16年（1521年）
- 万暦21年（1593年

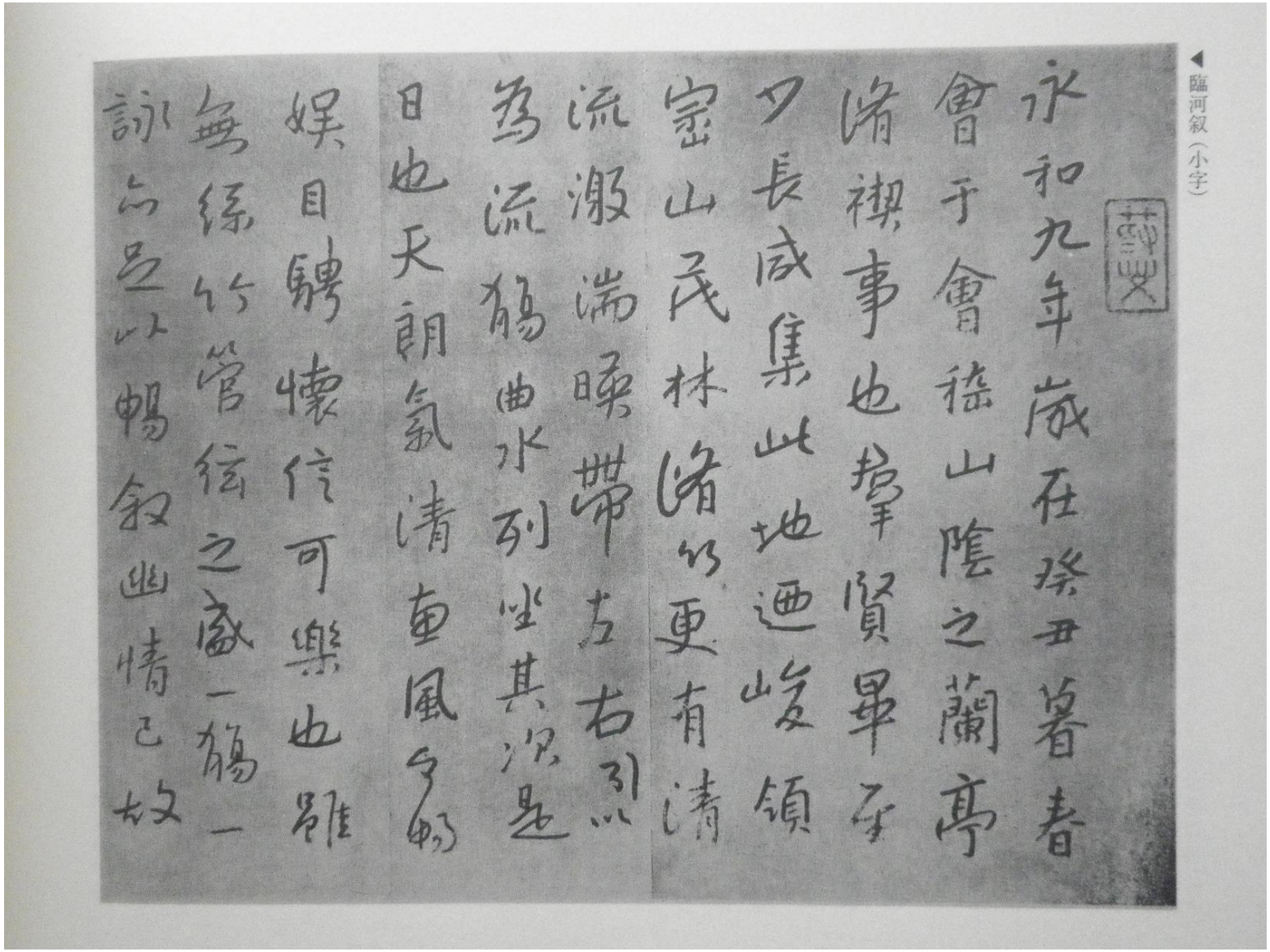
第三二章 「書という戦場」
徐渭　「美人解詞」 291頁

第三二章　徐渭　Xú Wèi （1521－1593）「美人解詞」293頁



王鐸 「行書五律五首巻」
第35章 「媚態の書」 315頁

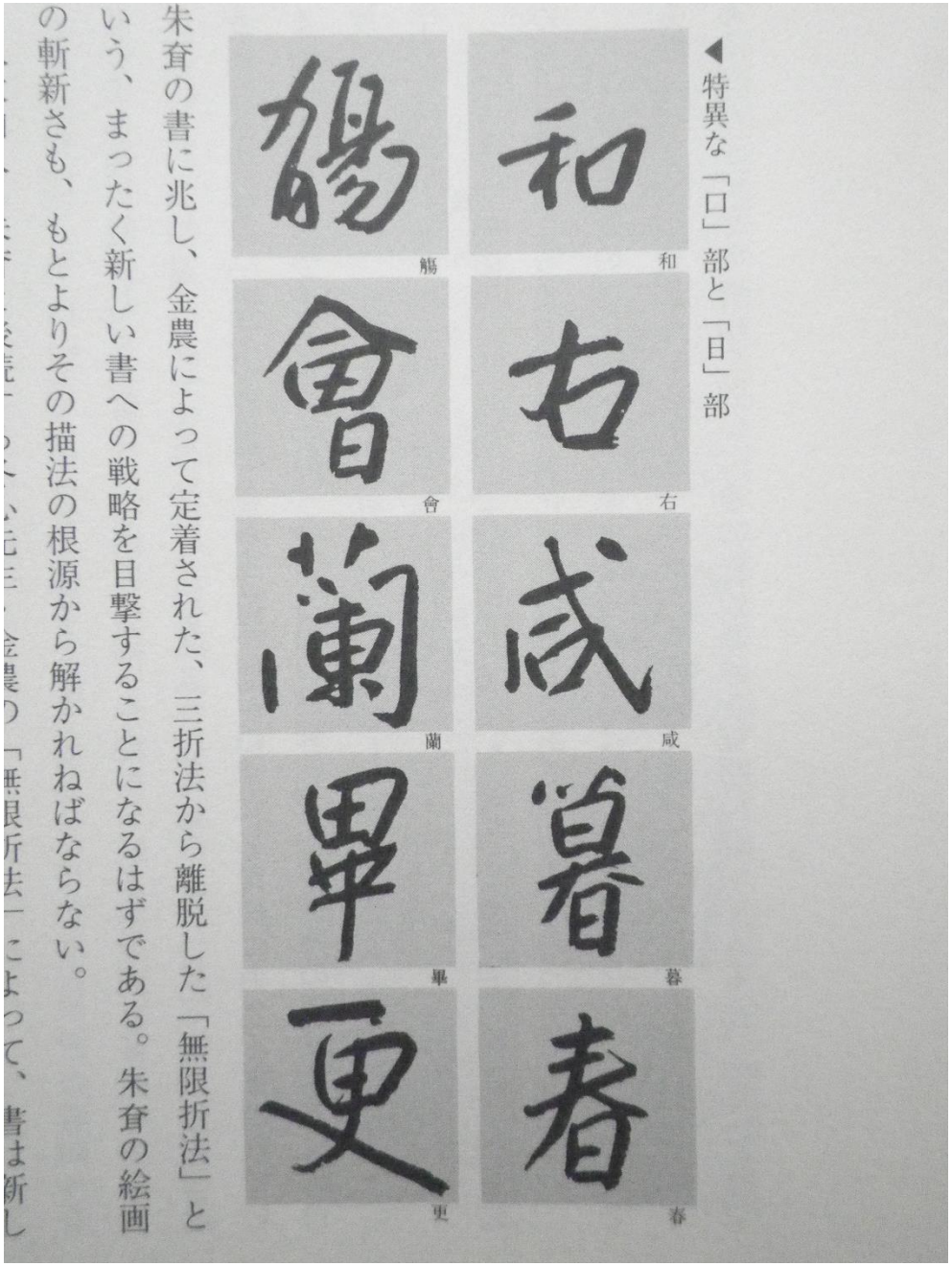
おうたく、Wáng Duó; 1592–1652
（1592年 – 1652年）、明末清初の書家



八大山人（はちだいさんじん、Bādà Shānrén、本名:朱耷（しゅ とう、Zhū Dā）または朱由桜（しゅ ゆうすい）、1626年? - 1705年?）「臨河叙」（小字）

第36章 「無限折法の兆候」 328頁 「ぶっきらぼう」

朱耷（しゅ とう、Zhū Dā：
1626年? - 1705年?）
八大山人
「臨河叙」（小字）３２８頁



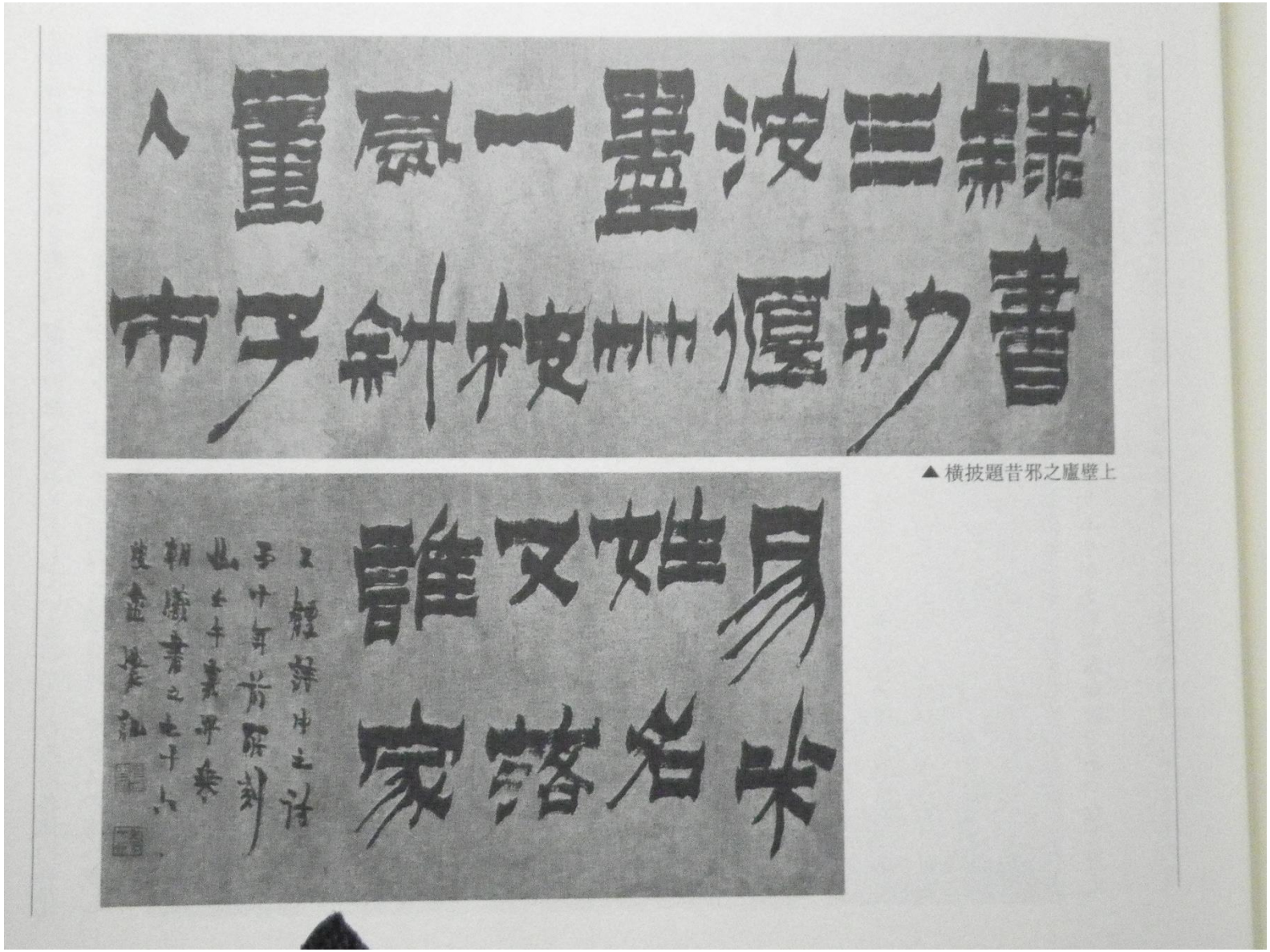
◀特異な「口」部と「日」部

和　右　咸　暮　春

觴　會　蘭　畢　更

朱耷の書に兆し、金農によって定着された、三折法から離脱した「無限折法」という、まったく新しい書への戦略を目撃することになるはずである。朱耷の絵画の斬新さも、もとよりその描法の根源から解かれねばならない。

刀の刃をまるごと毛筆に呑み込んだ」



▲横披題昔邪之廬壁上

金農「横披題昔邪之廬壁上」

Jin Nong:金農(1687-1763)

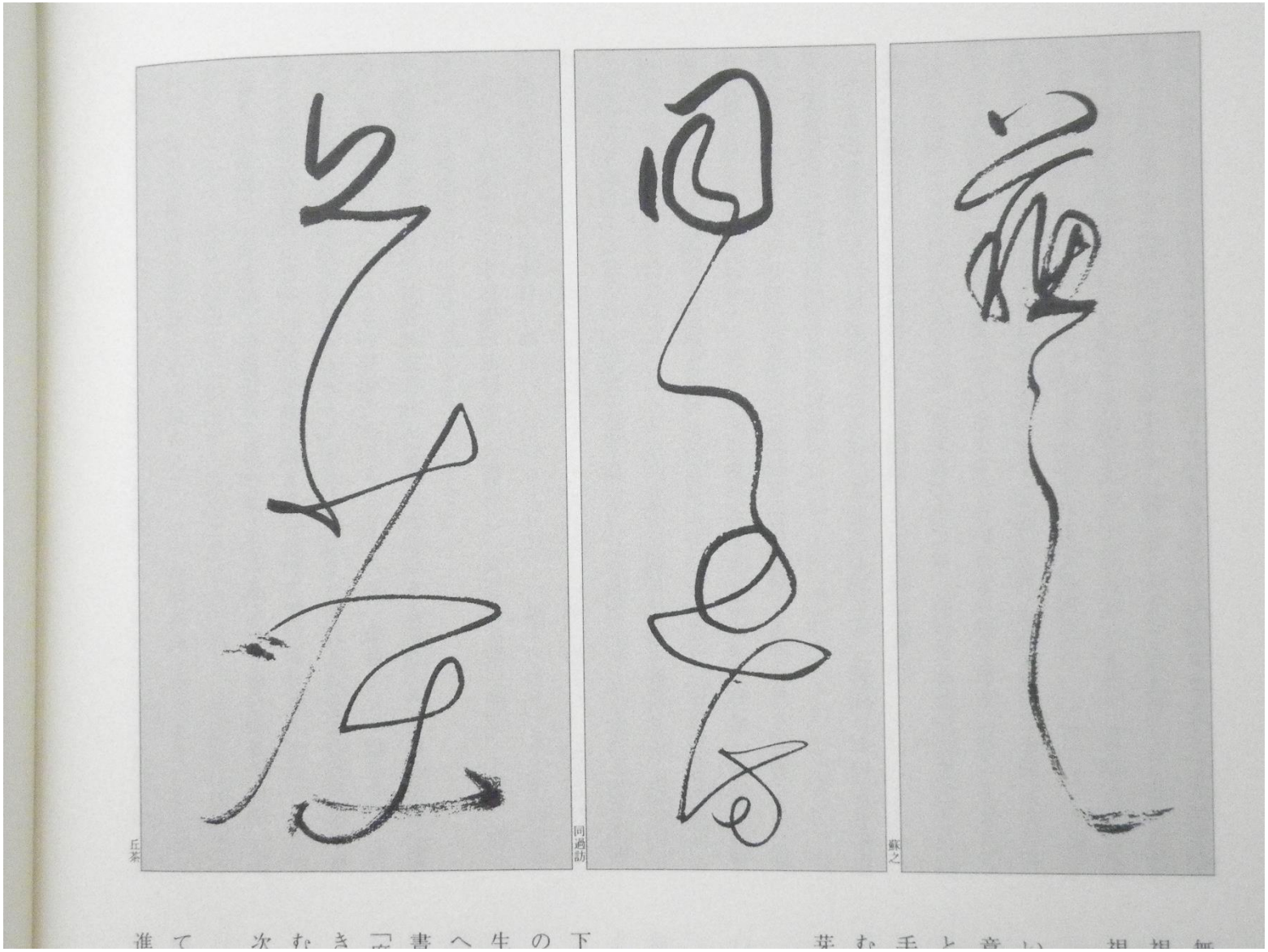
第37章「刀を呑み込んだ筆」335頁

低く身構える書

鄭板橋/鄭 燮
第38章　「身構える書」
337-339頁

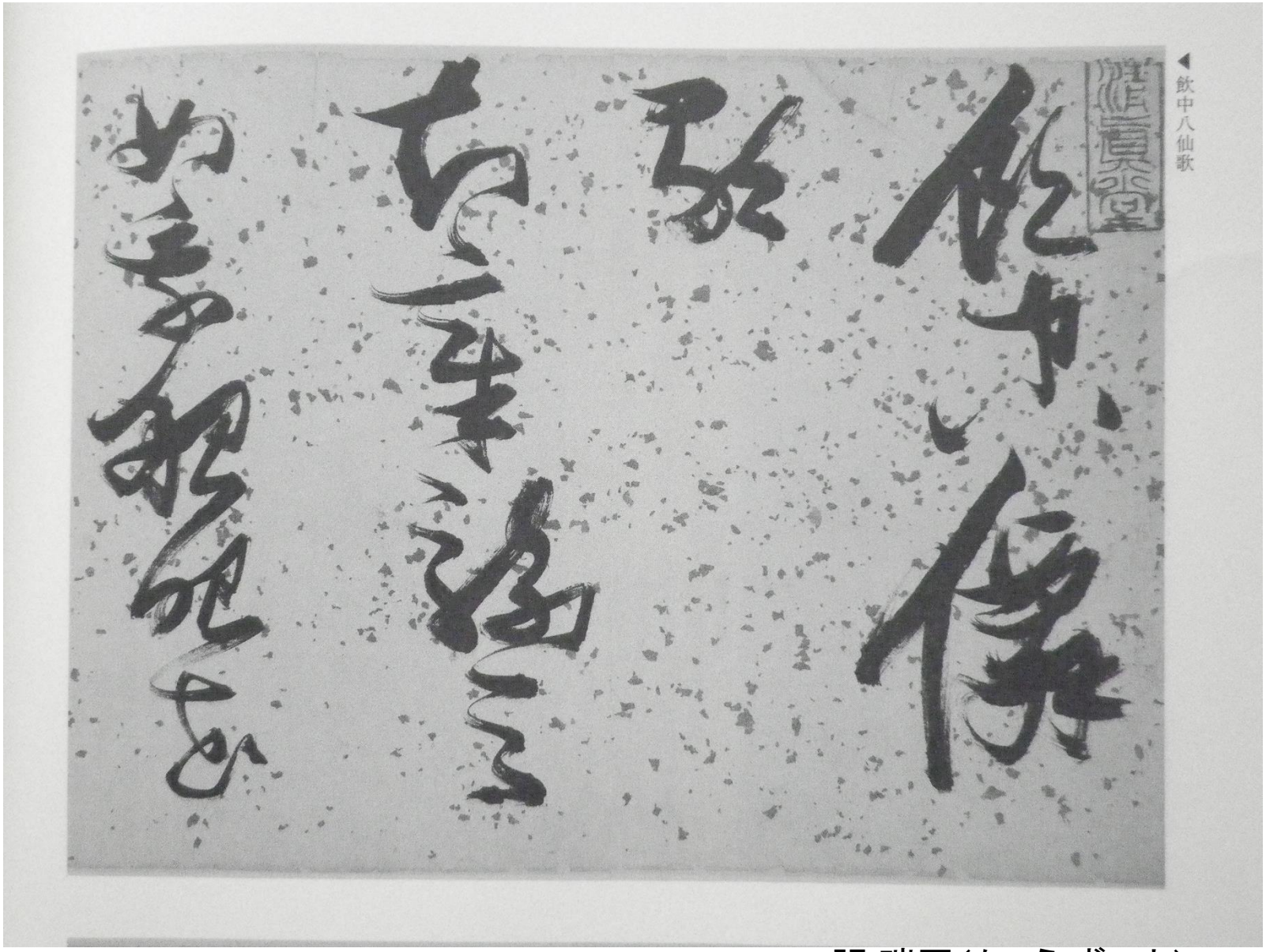
鄭 燮（てい しょう、Zhèng Xiè)
Zhèng Bǎnqiáo (1693–1765),
康熙32年（1693年）-
乾隆30年（1765年））

自在のうらに潜む跼蹐と屈曲



董其昌　Dǒng Qíchāng 「行草書巻」
第33章 「レトリックが露岩」 302頁

嘉靖34年1月19日（1555年2月10日）-
崇禎9年11月11日（1636年12月8日））

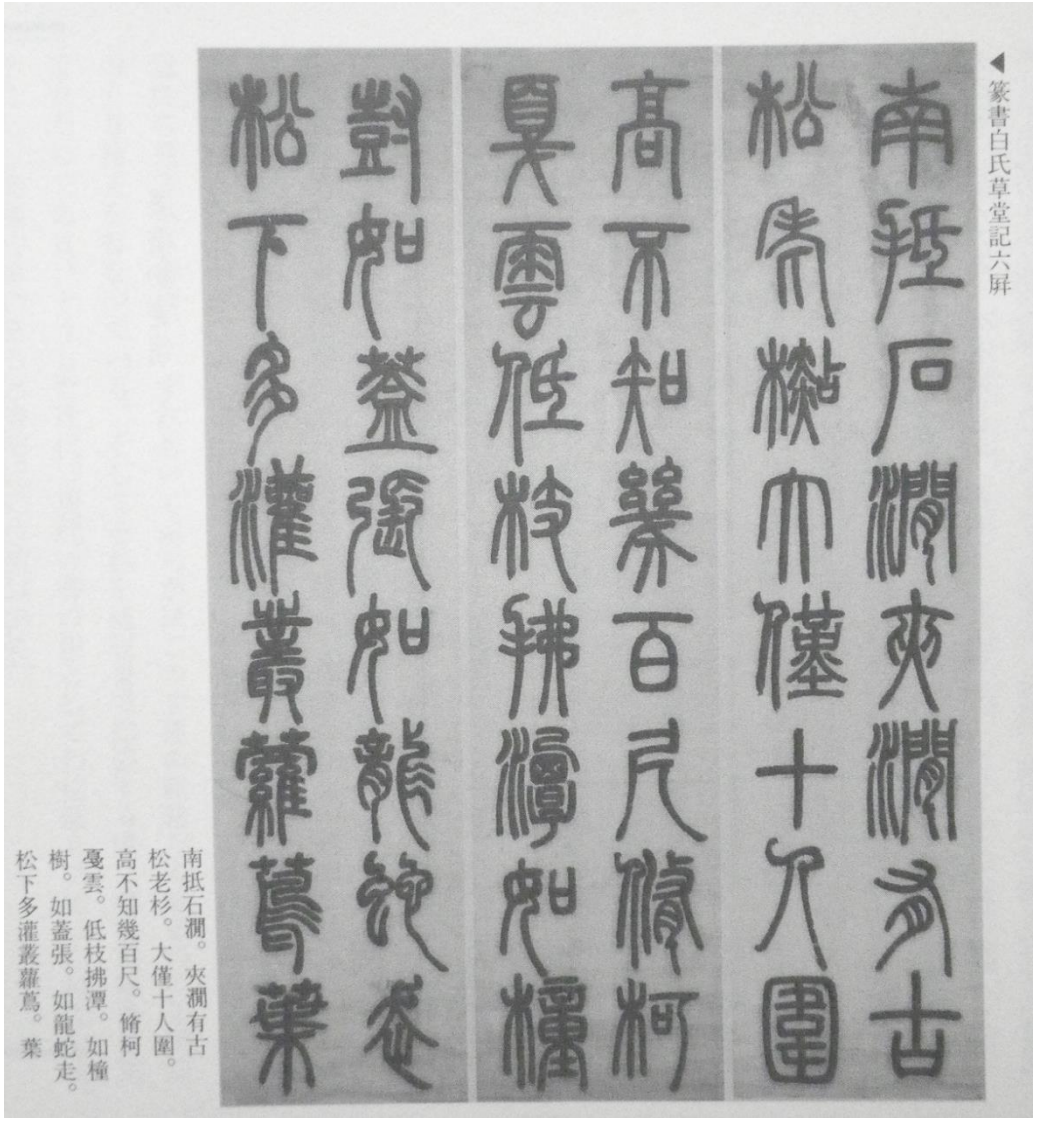


張瑞図　「飲中八仙歌」

第三四章「自己求心の書」３１０頁　「剃刀」

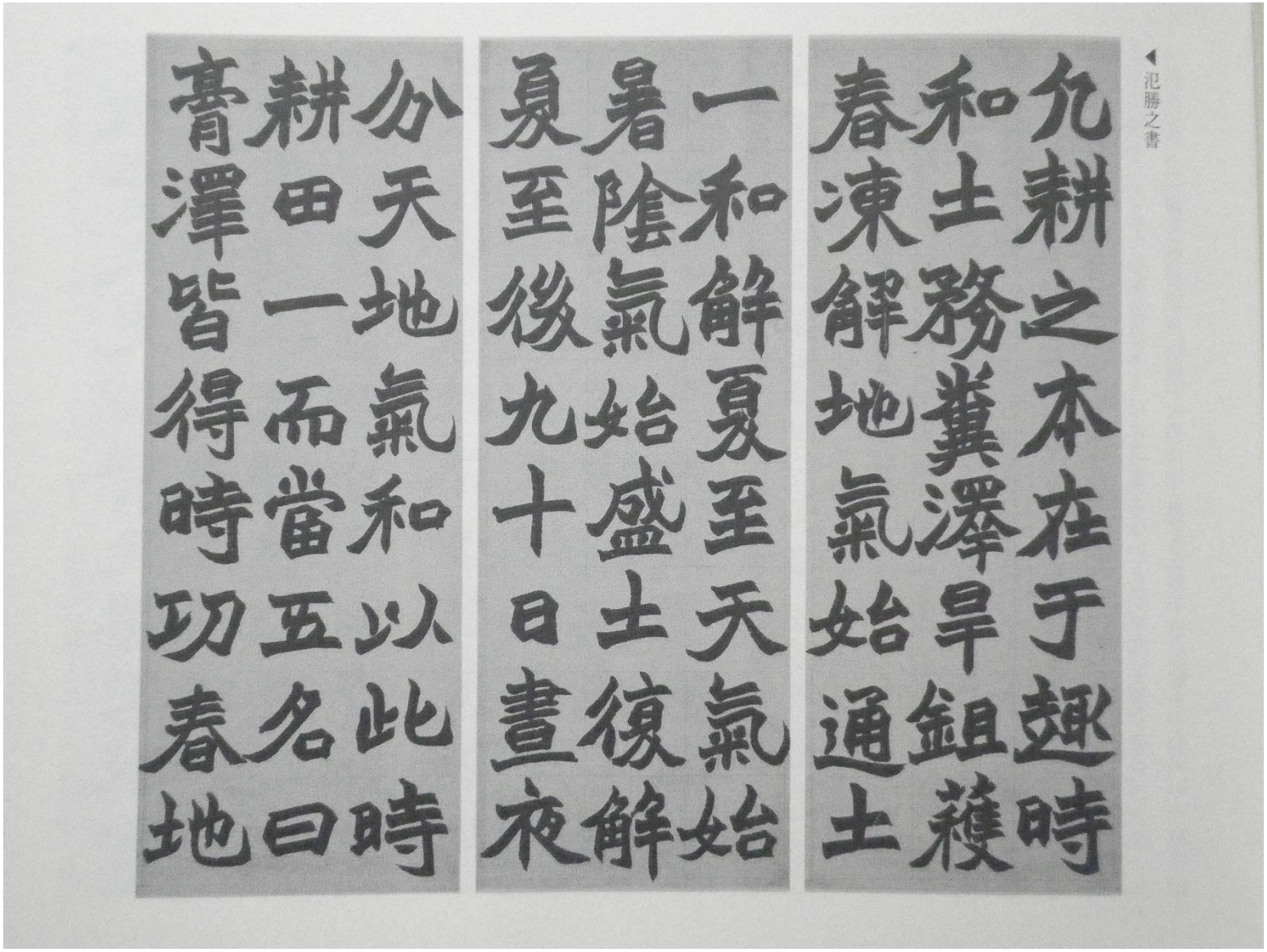
張 瑞図（ちょう ずいと）
1570年 - 1640年以後

篆書や隷書を無理やり紙本のうえに奪還する疑似古典復古の時代錯誤



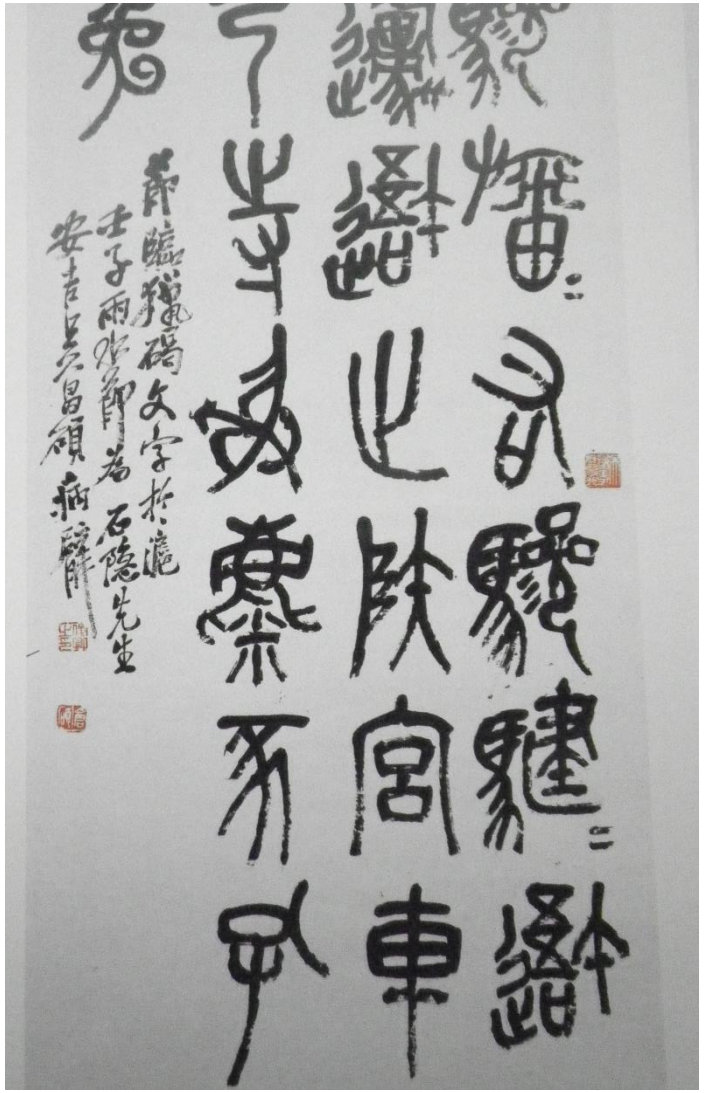
鄧 石如（とう せきじょ、
Deng Shiru.
1743年 - 1805年）
「篆書白氏草堂記六屏」

第40章「方寸の紙」」352頁

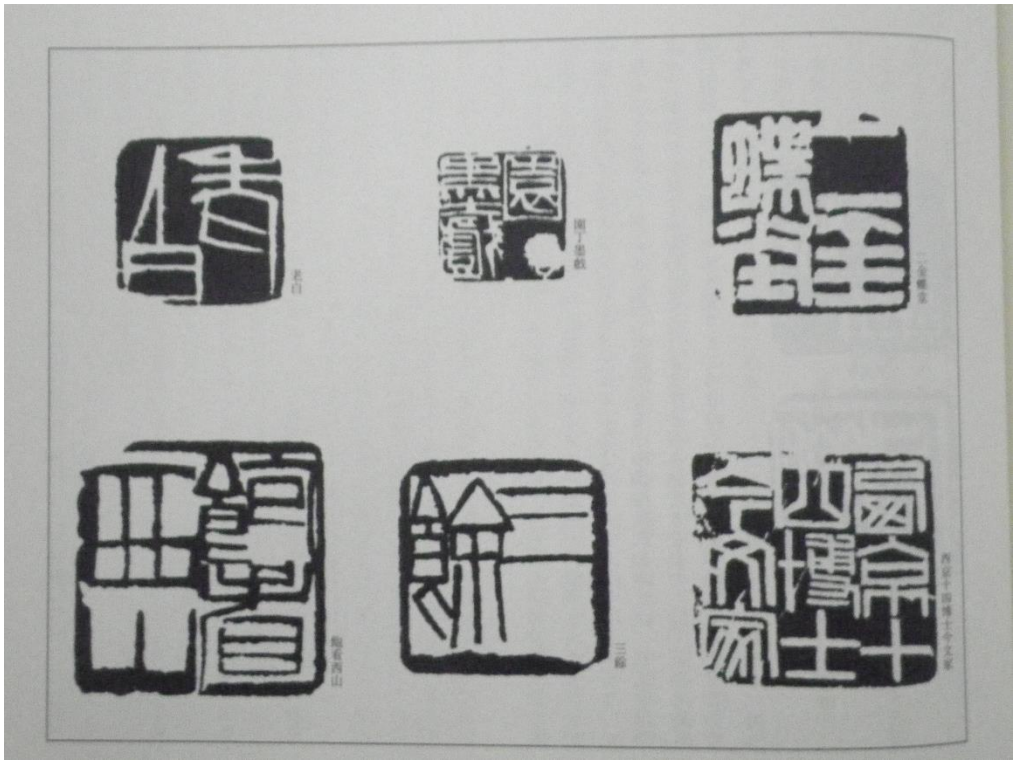


趙 之謙（ちょうしけん、Zhao Zhiqian、1829年7月9日 - 1884年10月1日）
第42章「碑学の終焉」　「氾勝之書」378頁。

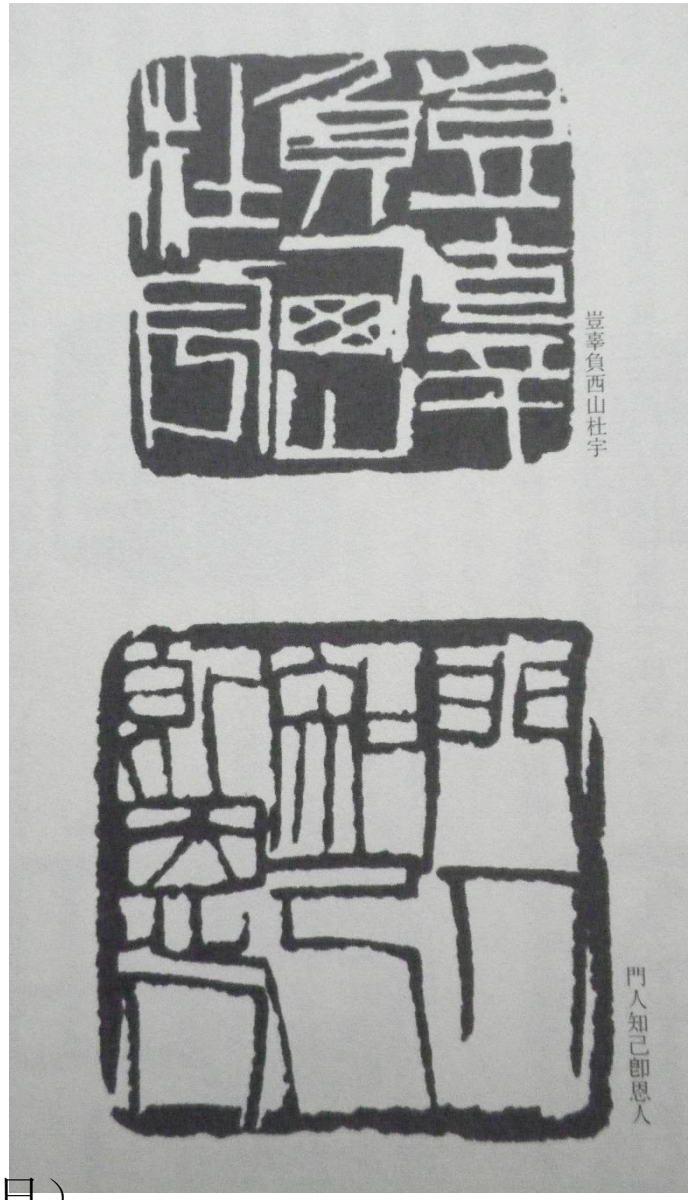
篆刻への退却による、書からの越境



呉昌碩 ，Wú Chāngshì
（ごしょうせき
1844年9月12日 - 1927年11月29日）
第44章 「境界の越境」呉昌碩

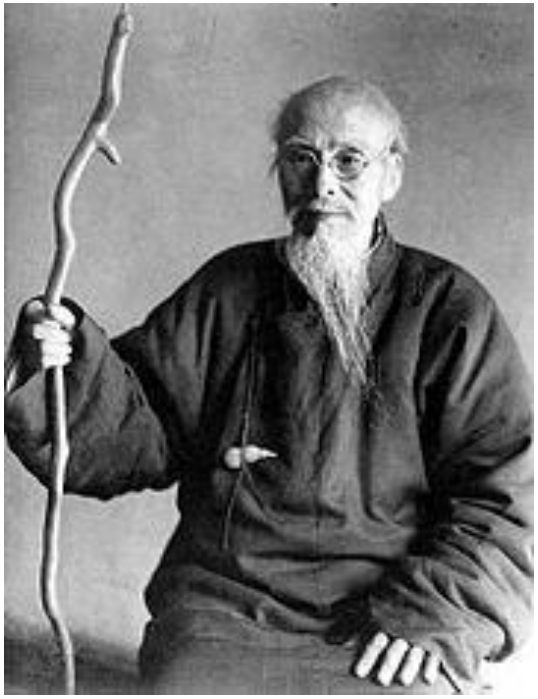


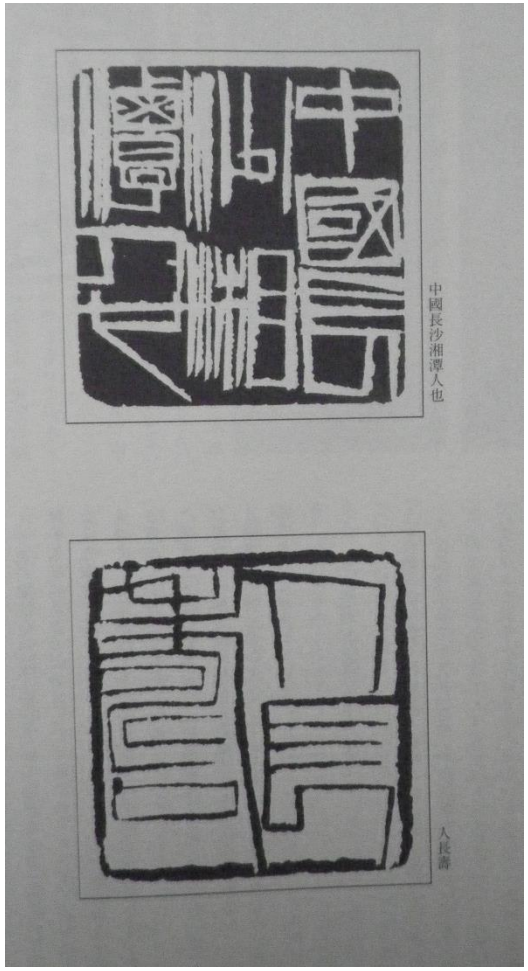
第43章　現代篆刻の表出　　斉白石▲ ▸

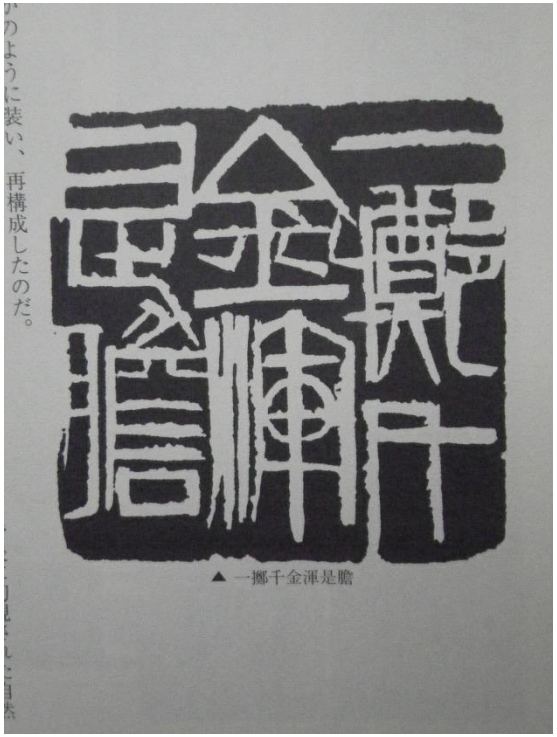


表現への脱却

斉白石　Qí Báishí（1864年1月1日－1957年9月16日）
湖南湘潭人　　第43章「現代篆刻の表出」381,383頁







齐白石　Qí Báishí
（1864年1月1日－1957年9月16日）
湖南湘潭人
第45章 「斬り裂く鮮やかさ」396-397頁

- utsusu
  移す replace写す duplicate 遷す transfer
- utsuru
  移る pass, change 写る 映る 遷る move in/out
  utsuku うつく 虚く、空く absent minded, stupid, imbecile …

- utsushimi 現し身 現世⇒ utsusemi 空蝉 cicade's empty shell
  real body real presence cast-off skin, slough

うつせみのからは木ごとにとどむれど
魂のゆくへを見ぬぞかなしき (古今・物名）
Cast off skin of the cicade remains on each trunk of the trees,
And alas, the souls within have moved away I don't know where

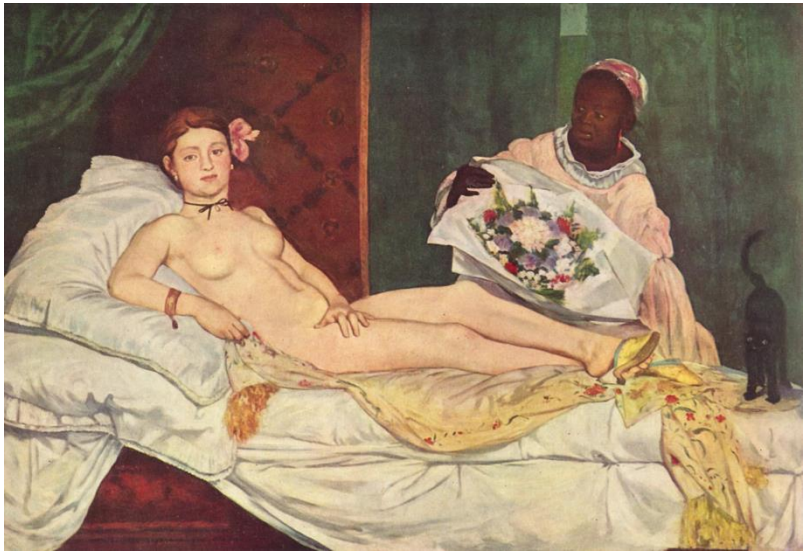
utsuro うつろ empty うつろひ passage, reflection, transfer
utsubo うつほ empty, void, hollow… うつは 器 わ=輪

Utushimi
Presence
Existence
≒
Utsusemi
Absence
Disappearance

うつせみのからは木ごとにとどむれど　魂のゆくへを見ぬぞかなしき（古今・物名）
Cast off skin of the cicade remains on each trunk of the trees,
And alas, the souls within have moved away I don’t know where

刻印と反復

Utsushi－to Multiply
imprint
printing and repetition
&
utsuri-Passage



文化生産者としての《作者》

森村奏昌　Morimura Yasumasa
(1951-)
《肖像　双子》1988

エドゥアール・マネ　Édouard Manet
1832-1883, L'*Olympia*, 1863

“ Dao 道 is in the Passage rather the Path.”
道とは「小径である」というよりも、むしろ「通過のうち」に存する。
Tenshin, Okakura Kakuzo, *The Book of Tea*, 1906

L’artiste est l’homme sans contenu, qui n’a d’autre identité qu’une émérgence perpétuelle audessus du néant de l’expression, ni d’autre consistence que cette incompréheisible sation en-deçà de soi-même.

Geroges Aganben, *L’homme sans contenu*, 1996, trad.franç. par Carole Walter, Circé, p.94

芸術家は中身のない人間である。かれは表現の無のうえに永久に顕現するよりほかに、いかなる自己同一性も持ち合わせておらず、自分自身の彼岸の不可解な留=状態＝姿勢stagioneのほかには、いかなる整合性＝定常性も持ち合わせない。（稲賀試訳）

ジョルジュ・アガンベン 『中身のない人間』 岡田温司ほか訳、人文書院、2002年